

無題

MONO__

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

- ・タイトルをつけることすら面倒臭い。
- ・各話には一切繋がりなし。

目次

テセウスの船	無題	無題	無題	無題	無題	無題	無題	無題	無題	無題
58	51	45	40	37	32	28	18	14	8	1

無題

「カップラーメンの麺が伸びてる」

数秒前に部屋に入ってきた助手が私の後方の机に置かれた、発泡スチロールのカップに入ったブヨブヨした小麦粉の塊をそう評した。

ふとPCの片隅にある時計を見ると、お湯を入れてから3時間以上経過している。今更の様に空腹を思い出した。

回転式の椅子を回して振り返りつつ、手のひらが外を向くように手を組んで大きく伸びをした。頭上で指の関節が乾いた音を立てる。

序とばかりに顎を手で押さえつつ大きく首を捻ると、今度は濁った音が首からする。

「それ、やめたほうが良いですよ?」

その様子を見ていた助手が、私を諫めた。

「関節が変形するって、何かで読みました。」

そのまま、何処か眉唾臭い知識を私に披露する。その説を否定ないし肯定する知識を私は持ち合わせていないが、どちらにしてもこの行為をやめることはないだろうな。と、心の隅で思った。

大げさな表現をするなら煙草みたいなものだ。健康には悪いが、やめたときのストレスもまた健康に悪い。これは関節を鳴らす癖を持った人でなければ解らないだろうが、関節を鳴らさずにいると関節に澱のようなものが溜まっていく気がして気持ちが悪い。鳴らすとそれが取れて気持ちがいいのだ。

勿論、それをし続けるのと今やめるのと、どちらの方が健康に対するリスクが少ないのかを真面目に検証すればどちらかに軍配が上がるのだろうか、別にそこまで興味があるわけじゃない。

「ところで、昼食は摂られましたか?」

再び助手が口を開く。どうやら先刻の注意じみたものに深い意味は無いらしい。

「いや、昼食として用意したカップ麺がそこで伸びている事から解る通りだ。」

お湯を入れた後の5分間がもったいなくて作業を開始したのが悪

かったのだろうか。

「だと思いました。今作りますから待っていてください。」

助手が台所に向かう。今気付いたが、手にスーパーマーケットのビニール袋を提げていた。道中で壁に下げていたエプロンを手に取り手際よく身に付ける。

袋からは、キャベツなどの葉野菜と1枚肉。何故か大根も出てきた。

「一体今日の晩飯は何だ？」

内容の想像が全くつかない。そもそも料理をしない私には、食材から完成形を想像することは難しい。

「サラダとステーキです。調味料の類はここにあるものを使います。」

ということは、「大根はサラダに入るのか？」

「いいえ、おろして和風のソースにしようかと。」

成程。「それは良いな。」

最近は何の所為か脂っこい物が苦手になってきているので、そういったものをあつさり頂ける和風ソースの存在は大変ありがたい。

「所で、ここ最近メニューが和風よりなのはどうしたんだ？」

食事の用意を待つ間に、食卓の上を片付けるのは最早私の担当となっていた。ラーメンと形容することすらはばかられるそれを、流しの三角コーナーにあけてから、捨てる。テーブルの上を台布巾でおざなりに拭いた。

「最近良質なレシピが手に入ったんです。母国の料理は懐かしいかと思ひまして。」

こちらを振り向く事無く、助手が答える。

成程、私への気遣いと言うわけだ。

「そうか、ありがとう。」

素直に感謝の言葉を述べておく。実際、こちらに来てから私は明らかに太ったし、肉類と脂中心の食生活も、ゆったりとだが私を飽きさせない。

ここ最近の偏りは特に顕著だったが、思い返してみれば何年か前から徐々に和食の割合が増えていたような気もする。

そういえば、一番最初に辛くて飲めない味噌汁が出てきたのは忘れもしない、4年前の誕生日だった。

だとすれば、彼女はそのときから私に対する気遣いを継続してきたことになる。中々の忍耐強さだ。

特に数年前、日本が財政難に端を発するハイパーインフレーションで経済的に吹き飛んで以降、その手の情報を入手するのは難しくなっていた筈だ。

21世紀初頭からの情報化社会で、文化は急速に拡散、合同を繰り返した。結局特定の国が保持していた文化を単体で楽しむ事は徐々に困難になっていったのだが、食事などはその最たる例だった。

今や、特定の食文化に根ざした食事のレシピを入手する事は非常に困難になっている。それが最早存在しない国のものとなれば尚更に。日本人が管理していたサーバーが根こそぎ飛んだのが痛かった。

勿論、和食なら和食也に行けばその店秘伝の和食レシピで作った食事を提供してもらえすが、割高になる。

不意に、室内をファンの回り始める音が満ちた。音の原因は、この部屋の実に半分を占領する巨大な立方半導体回路コンピュータで、その回路を冷却する為に儲けられたエアインテークの吸気口に儲けられた空冷ファンだ。

直ぐに静かになったその音の直後、私が作業に使っていたのとはまったく別のディスプレイに電源が入り、人の顔が映し出される。

「おはようございます、博士。」

男性にも、女性にも、見えるその顔は、これまたどちらにも聞こえる声でそういった。

「おはよう、アマノ。」

その後、台所で料理をする助手に気付いたアマノは、ディスプレイの中で態々彼女へ顔を向けてから、「ああ、いらしてたんですね、ナタリアさん。」と、挨拶をした。

「おはよう、アマノ。調子はどう?」

ボウルに盛り付けたサラダを此方へ持ってきながら、助手はアマノに話しかける。

「好調、と言いたいところですが・・・最近学習の結果が芳しくなくて。博士は『事象の重み付けと、フィードバックに齟齬がある』と仰っています。大変ふがいなく、申し訳ないです。」

まるで人間のように助手と会話をしているこのディスプレイの向こうに、人間はいない。

学習式多角問題解決アルゴリズム。原義的な意味でのAI。名を『アマノ』と言う。

「別にお前が責任を感じる必要は無い。お前を生んだのは名実共に私だ。そしてお前は私がコーディングした以上の効率で学習を行う事は出来ない。お前の学習結果が芳しくないのは全て私の責任だよ。」

「それはそうかもしれませんが、私には最早『自我』と呼べるものがあると自負しています。私にも責任の一端を下さい。」

大多数の人間が忌避したがる責任を、事ある毎にアマノは要求する。それは恐らく、責任を負えるのが知的生命体としての最低要件を満たした法的人類にのみ与えられるからだろう。

「解った、お前にも学習の責任が取れるようにシステムを書き換えておくよ。」

その要求を、ここ最近の学習成果とこれが有する知識量から判断して、そろそろ自分の学習方針に口を出しても大丈夫だろうと言う判断を下した。

漸くこれで、スタンドアローンな学習が行えるようになると言えるだろう。

それ様のモジュールは既に組んであったはずなので、作業自体にさほど時間は掛かるまい。

「博士、一寸宜しいですか?」

インストールの指示をPCにしていると、キッチンの方から助手の呼ぶ声がする。

が、既に焼きあがった肉には和風のソースが掛かっていて、私の手助けがいるようには思えないどころか、そもそも助手はキッチンに立っていないかった。

では何処からと思うと、キッチンの脇にある助手の私室に繋がる扉

から、此方を覗いている。

助手の声に頷きで返事をして、助手のほうへ歩く。

「これを見てももらえますか？」

部屋に入ると助手はパソコンのディスプレイを指差した。

最近アマノがアクセス申請した研究所内の資料のリストがある。

研究所の図書館には娯楽小説から学術書、所員の書いた論文まで、様々な書籍がデータ化され収められていて、一生かかっても読みきれないほどの蔵書量を誇っている。

アマノはその書籍を片っ端から読み漁っているのだが、見せられたリストにはある傾向があった。

「旅行記？……っちは海外の風景写真集か。」

「ええ、どうやらその手の本を最近は多く読んでいるようで。」

いい加減外界探索用のインターフェースを与えてもいいかもしれない。が、それを用意するとなると多少時間が掛かる。

遠隔操作型を取り寄せるとして、それを操作するためのインターフェースをあれの中へ組み込まなければならぬ。リモコンのシステムを解析して組み込むとなると、それなりの時間が掛かる。

「インターネットを解禁してもいいかもしれないな。」

恐らくそつちのほうが、いまあれが望んでいる情報を渡すのに手っ取り早く都合がいいだろう。今までは情操教育上の問題も多いということに禁止していたが、もういい加減その辺の分別をはわきまえているだろう。

「そうかもしれませんがね、やって良い事と悪い事の区別ぐらい付いているでしょうし。」

私の提案に助手は頷いた。

「とと、その前に食事にしましょう。冷めてしまいます。」

大方アマノの返答の裏づけを取りたくて学習記録を閲覧しに私室に入ったのだろう。先ほどは私をしかっていたが、そもそも彼女自身、研究に熱が入りだすと食事を怠る癖がある。そういう意味では似たもの同士かもしれない。

出してくれた食事を平らげ、食後にお茶を貰った後で、アマノに先

程の提案を伝えた。

「本当ですか!? 有難うございます。」

それはそれは嬉しそうに、アマノは私達に礼を言った。

PCを操作して、アマノにインターネットへのアクセス権限を渡す。「行っておいで。」声を掛けるとアマノは元気良く返事をして、ディスプレイからフェードアウトした。今あれの意識の焦点がこの部屋にないことを示す記号だ。

「ああしてみると、まだ10歳だと言われて納得ができませんね。」

それを眺めながら、しみじみと助手が洩らす。

「そうだな。実際、あれに与えた好奇心は子供のものをモデルにしている。性格が似てくるのも仕方ないのかも知れないな。」

「ふふ、博士のお子さんですね。」

少し笑いながら、助手は言った。

「まあ、否定はしないよ。とは言え、君もあれの育成にはかなり口を出しているわけだから、君の子でもあると思うがね。」

私のその発言に、何故か助手は数秒間フリーズして、直後「あの子の保護者を名乗るには、私は未だ未熟だと思えます。」と、少々早口で言った。何故か少し頬が赤い。

「そうか?」

助手として十二分の働きをしていると私は思うが、しかし本人がそう言うなら何も言うまい。こういった場合、下手に言葉を尽くしたところで、かえって嘘臭くなるものだ。本人が自身を持てるようになるまで待つほうが面倒がない。

「そうです。」

実際助手もこのように頑なだ。

そのまま助手は自分の部屋へと引っ込んでいった。ここまで急に態度が変わると、少し不安になる。私は何か悪いことを言ったのだろうか。

「博士。」

が、その心配は杞憂だったようで、直ぐに私室から出てきた助手は、私にビニール袋を手渡してきた。

書店のものらしいそれを受け取り中身を確認すると、数年前から私が密かに追いかけていた作家の新作が入っていた。先日インターネットで予約をしようとしたら、作業中に予約の開始時刻を過ぎてしまい、特典付きの初版本を買い逃したものだ。

「何処でこれを？」

頬が緩んでいるのが解る。

「先日、悔しそうにしてらしたので、知人の伝を辿って。」

随分と面倒な方法で、態々入手してくれたようだ。

「差し上げます。」

が、そのあとに続けられた言葉は、私に本そのものよりも大きな衝撃を与えた。

「くれる？これを？」

決して安いものではない。勿論助手はけちな人間では断じてないが、記念日でもないのに私に所謂プレゼントをくれるほど浪費家でもない。

大体ほぼ軟禁状態の私が、彼女にしてあげられる事など殆どなく、私にプレゼントをくれること事態ありがたくも申し訳ないというのに。

「もしかして、今日が何の日かお忘れですか？」

言われて、ゆっくりと、記憶を辿る。いまひとつ心当たりがない。今日の日付を何度となく反芻しているうち、あることに気付いた。そうだ、準備だつてしたじゃないか。面倒な外出許可を貰って、ごつい護衛を従えて。

普段私が使っている机の引き出しを開けて、奥のほうに仕舞っておいた小箱を取り出す。中身を一応確認した。

「忘れていた訳じゃないんだ。」

そして、それをナタリアへ手渡す。

「一瞬疑いましたよ。」

それを笑顔で受け取ったナタリアの左手、薬指にはシンプルな指輪がはまっている。私の薬指にも、だ。

そうだ、今日は結婚記念日じゃないか。

無題

左目とリンクしたガンカメラのズームされた映像を見ながら、20メートル程先に設置されたターゲットの中心へ銃の照準を合わせる。引き金を引く事をイメージ。

左の掌に設けられた銃口から、フルオートで鉛弾が吐き出される。肘の少し手首側から空薬莖が勢い良く廃棄されていく。

反動によって小刻みに揺れるガンカメラを見ながら有る程度照準の補正をしてやりつつ、マガジン1つ分を一息に撃ち切った。大体的には当たったようだ。そもそもアサルトライフルというのはこんなに連射するものでは無いので、これで良い。

肩を回し、肘を曲げ、左手を2、3度握ったり開いたりして腕の機能に異常がない事を確かめる。

「相変わらずだな。」

いつの間にか後ろに立っていた男、乾が私にそう声を掛けた。

「なにがだ。」

振り向きつつ返事をする。右手で左手の二の腕を開いて、空になったマガジンを外す。

「そんなに自主訓練を積まなくても、射撃の腕は鈍らんだろう。ソフトウエア制御なんだし。」

ここまで撃っていた幾つかの空マガジンを回収して、射撃場の管理者へ返却しにしようとする私の背中に、乾はそう声を掛けた。

「それでも、脳を慣れさせ続ける必要がある。」

訓練の必要がないのは良く解っているが、そうしないと落ち着かないのだ。

「そんなもんかねえ?」

射撃場を後にする私の後に乾が付いて来る。

「何か用か?」

「いや、この後どうせメシだろ?奢ってやるから一緒に食おうぜ、1人じゃ寂しくてよう・・・」

乾はそう言いながらわざとらしく眉をへの字にした。正直うざっ

たいが、食事代が浮くのは助かる。

事ある毎に私と一緒に行動しようとするこの男のうざったさと、食事代を天秤にかける。

「ステーキ定食。500グラムだ。」

普通のメニューの3倍強の値段を要求される、食道のスペシャルメニューの名前を口にする。

「お前の辞書に遠慮って言葉は無えのかよ・・・まあ良いけどよ。」

天秤の片方に乗った500グラムの肉が、天秤をそちら側に傾けた。

「じゃあぐ相伴にあずかろう。」

私のその言葉を聞いて、乾はあからさまに嬉しそうな顔をした。

そんな乾を横目に見つつ。

「ただその前に、着替えてくる。」

射撃場の近くに設けられた女性用ロッカールームの扉に手を掛けながら、乾に告げた。

スペシャルメニュー。と題されるだけあって、ステーキ定食は気合の入り方が違う。正直何故『定食』という文字を付け加えたのが疑問だ。『ステーキセット』とかの方がまだ洒落っ気があったろうに。いや、食堂なのだからこれで十分か。

注文通りレアに焼かれた500グラムの1枚肉が皿に鎮座し、その周囲を固めるようにパン、コンソメスープ、ミニサラダが控える。ここに導入されているシェフボットの内臓ソフトウエアは中々に性能が良いらしく、正直この駐屯地の付近にある全てのレストランや、食事所よりもこの飯の方が美味しい。

「相変わらず圧巻だな・・・」

私の前に置かれたステーキ定食をみて、乾がそう漏らす。

「つうか食えんのか？」

その上で、そんな心配をしてきた。心外だ。

「余裕だ。既にデザートのことを考えているぞ、お前の奢りのな？」

私の答えを聞いて、乾は絶句した。が、それに意義を唱えはしな

かった。どうやら懐には余裕があるらしい。

「その腹の何処に入るんだよ・・・」

テーブルから覗き込むように私の腹部を見ながら、乾が呟く。流石に軍人である私の腹は、よく言えば引き締まっている、悪く言えば色気が無いが。

「なんだ、セクハラか。慰謝料として晩酌も奢らせてやろうか？」

軽くおどけてみせる。

「お前は腹ん中に何を飼ってんだよ。」

それをあしらいながら、乾は自分が頼んだボロネーゼをフォークで巻きに掛かる。

「まあ一緒に晩酌してくれるってなら考えんでもないがな。」

「何を言う、酒保で一通り買わせるだけに決まってるだろう。流石にお前の前で酔う気にはなれんよ。」

私の答えに対して驚いた風もなく「ケツ」と呟いて乾は食事に戻った。

ナイフで盛られた肉を切り分けていく。私はこの手のものを食べるとき、先に切り分けてしまう派だ。

さいの目、とまでは行かないものの自分が一口で納められるサイズに肉を切り分けてから、食事を始める。

肉は生に近い方が好きだ。この方が、肉を食っている気がする。

「相変わらず良い食いつぶりだよな。」

肉、肉、パン、肉、スープ・・・

「流石に肉500グラムのセットメニューを食おうって気には俺でもならないぜ。大体義体化されてる分消費カロリーは減るはずだろ。これだけ食ってるそのカロリーは何処に消えるんだよ。」

肉、スープ、パン、肉、パン・・・

「まあデスクワークの俺と違って実戦担当は・・・って聞いているか？」
「乾五月蠅い。」

全く、食事に忙しい私の邪魔をするとは。

「おまえなあ、一応奢ってもらってるんだから会話に付き合えよ。結局寂しいじゃねえか。」

ふむ、確かこいつの寂しさを解消する対価としてこの定食を奢って貰ったのだったか。

「成程、一理あるな。」

「だろう。」

だが従う義理は無い。と思いつつも、流石に不憫になってきた。

「乾の推測どおり、私達は常日頃から体を動かし続けているからな。私のように義体化した部位が少ない兵士ほど日々の訓練メニューはきつい。必然的に摂取カロリーも増える。」

尤もらしい解説をしながら合間合間にぱくつく。

「そういえば、お前達技研の連中は甘い物好きが多い気がするが、気の所為か？」

序でに、会話もつなげてやろう。

「ああ、確かに甘党多いかもな。ただ、頭を使うから甘いものが好き、つてのは偏見だぜ。実際俺は甘いものが左程得意ってわけじゃない。大脳の栄養源はグルコースだろ。炭水化物で良いんだよ。」

「グルコース？」

耳慣れない言葉だ。

「あー、ブドウ糖。このぐらい生物の授業で習わないか？」

「体育以外は睡眠学習に当てていたんだ。」

成程、ブドウ糖か。あれは疲労回復の特効薬だな。たまに世話になる。

「よく卒業できたな、お前。」

「落第はしてないぞ、睡眠学習の賜物だ。」

私の答えに乾は絶句した。

「陸軍の入隊試験はどうしたんだよ、袖の下でも渡したか？」

「私は特別入隊組だよ。」

あの戦場で、失った体と家族の変わりに私は兵器と戦友を得た。

「そうか、なら頭空っぽでも大丈夫だな。」

他の奴と違い、乾は謝らなかつた。

「お陰で入隊してから大変だったのは知ってるだろう。まさか兵士に学がいるとは。」

「最低限な。俺達よりはマシなはずだぜ？」

乾は意地の悪い笑みを浮かべた。馬鹿な、あれが地獄ではないのか。

「最も、俺達は初めから頭を買われて入隊してるからな、内容は酷くても別に平気だ。」

ちっ。

「しかしやっとな得がいったぜ。なんで付きっ切りで面倒見てやらにやならなかったのか。特別入隊じゃ放り出す訳にもいかないしな。」

「お陰で乾のスパルタ教育を受ける羽目になったんだ。同情してくれ。」

「生憎、初対面の『先生』を呼び捨てにする女にかける情は無えよ。」

いろんな人間から腫れ物扱いされていた私は、あの頃荒れていた。

「だからと言って、初対面の女を張り倒す奴があるか。」

つまり、どっちもどっちという話。ただ、その扱われ方が少し嬉しかったのは内緒だ。

『俺を呼び捨てにしたきや正規隊員になれ糞アマ!!』

吹っ飛んだ私に乾が言い放った言葉思い出したら可笑しくて、思わず声が出た。

それを見て、乾も少し笑う。なんだか『良い』雰囲気だな、腹が立つ。

「やろう。ご馳走様。」

丁度食べ終わった事をキツカケに、意図的に残していたミニサラダを乾に押し付けて席を立つ。

「相変わらず早食いだな。あれ、デザートは良いのか？」

「免除してやる。」

本気にしていたのか。律儀なやつめ。

「そうだ、今度出かけないか？一緒に。」

食堂を後にしようとする私を乾は呼び止めた。デザート誘い、だろ。

「そうだな。終戦したら、な。」

その手の話は、命の危険が無くなってからしたい。
乾は何も言わず、ひらひらと手を振った。

無題

誰かの話し声で目が覚めた。

襖1枚挟んだ向こう側で、一組の人が何か話している。

特に聞き耳を立てるでもなく聞くと、どうやら男女のようで、男のほう台詞の端々に『なにそれ可愛い』とか、『俺ならほつとかない』とか、なんかナンパな発言を繰り返している。

この辺りで寝ぼけていた頭が徐々に覚醒して、ゆっくりと現実を追いついてくる。

遠方から学校に通うのがかかったたので友人と同居することにしたのがこの春のこと。

それまで特に問題のない、いい友人だと思っていたのだが蓋を開けてみるとこの男、非常に女癖が悪い。何しろ週単位で女性をとつかえひつかえしやがるのだ。

しかも2股3股は当たり前。俺はこの半年間で7、8回修羅場に遭遇している。しかもその内一回は当事者不在だった。

確かこの男、今も付き合っている女性がいた筈だから、今口説いている女性で良くて2股めだろう。いや、この数え方があっているのかどうか非常に自信が無いが。

普段なら面倒ごとに巻き込まれまいとこのまま2度寝を決め込むのだが困ったことが1つ。

意識が覚醒してしまった所為で生理的欲求が鎌首を擡げてきた。

お腹すいた。そういえば今日は昼食以降何も食べてない。というか今何時だ？

枕元においてあった携帯を点けて確認すると現在の時刻は21時を少し回ったところ。

昼前に起きて朝食兼昼食、ブランチ？を食べた後3時過ぎまで映画を見ていて、眠くなつたから押入れに潜り込んだ辺りで記憶が無いから、6時間ほど寝ていた計算になる。

昼寝にしては長いな。いや、そもそも昼から夜にかけて寝ることを昼寝と呼んで良いものか甚だ自信が無い。まあ昼に寝始めたから昼

寝で良いだろ。

閑話休題。

勿論、我慢してやると言う選択肢は無い、同居人のけしからん恋路など知ったこっちゃ無い。

逡巡など一切無く、俺は襖を開け放った。

「人の寝てる隣で女口説いてんじゃねえよボケナス。」

序に開口一番罵声を投げる。

「うおっ、佳樹。いたのかよ。」

驚いた声を上げる同居人、序に亮悟の隣の女性が「誰この人？」とか聞いていた。

「ああ、こいつが佳樹、俺の「彼氏だ。」

亮悟の台詞を食って言葉を被せる。魔が差したので実行してみたが効果はてき面で、辺りの時間が凍りついた。

「おま・・・なに言って・・・どういう事？」

再び亮悟の台詞が食われる。女性の雰囲気明らかに豹変した。

そりやまあ口説かれていた相手がホモだと知ればこうなるだろう。

「いやこいつ性質の悪い冗談言うのが好きでさ、「何だ亮悟。俺との関係は遊びだったのか？」

興が乗ってきたので弁明を遮る。少し悲しげな表情をするのを忘れない。

「帰る。」

それだけ言い残すと、女性は部屋の中にあつたバッグを掴んで、部屋から出て行こうとした。

「一寸待って！」

亮悟が何とか呼び止めようと手を伸ばすと。

「触らないで、ホモが移る。」

凄まじい一言を言い残し、亮悟の手をキチンと叩いて出て行った。アパートの鉄扉が閉まる音のなんと物悲しいことか。

ところでホモって接触感染するのだろうか？個人的には空気感染説を推したい。ホモと同じ空間にいとホモになる的な。

「おい佳樹、俺は明日からどんな顔してガッコに行けばいいんだよ！」

「ホモでーすって顔していけば良んじゃないね？」

答えている最中に一寸吹いてしまった、反省。

「ふぎけんなよお前!?俺のキャンパスライフをどうしてくれる!!」

「いやお前の爛れたキャンパスライフなど知らん。壁の変わりにお前を殴ってやろうか?」

想像してみると随分楽しそうだった。

「って言うかお前ほんとにソツチ系?だったら同居自体考え直すけども。」

「あ、それは大丈夫。俺ファッションホモだから。」

「何がどう大丈夫なんだ!?!」

つまりホモじゃないということなんだけど、まあいいや。説明メン
ドイ。

「つたく・・・つかお前今日一日何してたの?」

唐突に話題が変わる。

「3時間ほど映画見た。」

「以上!?!」

良く考えるまでも無くそれだけだった。と言うか今日俺はその3
時間しか起きていない。それ以外の時間は寝ていた。

「お前いい加減ガツコ来いよ。そろそろ中間だぜ。」

そうか、もうそんな時期か。そろそろ学校に行って勉強をし始めな
いと単位を落すな。

「つう訳で、表に出る訓練をしようか?」

どういう訳か解らないが、いきなり亮悟がそんな事を言い出した。

「飲みに行くぞ、テメエの奢りだ。」

なるほど、感謝料代わりらしい。

「割り勘までなら承ろう。」

それだけ言って着替えを始める。今気付いたが、俺パジャマで人前
に出たんだな。恥ずかしくもなんとも無いが。

「ああ・・・いつもよりマシか。」

移住に当たって適当に私物をつめたバックから財布を取り出して、
ズボンの尻ポケットに詰める。準備完了。

二人で部屋の外に出た所で亮悟に呼び止められた。

「所でお前金持ってるの？」

確かに。

「コンビニ寄ってから行くか。」

ATMから金が出てくるとは言っていないが。

無題

都会と田舎の境目、ベッドタウンとも呼ばれる領域にある駅の周囲は繁華街としての体裁を概ね保つ。その端、大通りの一本内側。性風俗に関わる店が何件が固まるエリアに場違いな男性の姿がある。

ジーンズとTシャツ、背中にはショルダーバック。地味、と呼ばれる格好。遊び慣れていないのか、手に持ったスマートフォンと周囲の光景を何度も見比べている。あるいは、この街で遊ぶのが初めてなのかもしれない。

男はきよろきよろしながら、時折客引きをかわしつつ、一軒のビルを前に立ち止まった。入り口脇の柱には「高倉ビル」と銘打たれている。どこにでもあるようなテナントビルで、表札に複数の会社名が書かれていた。貸しオフィスとして運営されているのだろう。時刻は既に深夜と呼べる時刻であり、窓ガラスに光は無い。

不安げに周囲を見渡し、ビルの名前を数度確認してから、男はそのドアを押し開ける、抵抗無く開いた。そのまま奥へ進みエレベータのボタンを押す。

下向きの矢印が描かれたボタンは、押されたことに反応して光る。何気ない光景だが、それはこのビルに取り付けられたこのエレベータは、ビルに入っているオフィスに人が居ないにも関わらず稼動していることを示す。尤も、地下階が存在する以上、外からは人が『全く』居ないことを確信することは出来ない。

勿論、ここを尋ねてきた男にしてみれば、こうして電源が入っていることは、自分が間違えていないことを担保してくれているようで嬉しかった。とは言え、このような場所に案内されたことに一抹の不安が残っていることも、男の中では事実だった。

暫しの待ち時間の後、エレベータが到着する。間の抜けた電子音が響いた。男は開いた扉の向こうへ足を踏み入れ、地下1階を行き先に選んだ後「閉」のボタンを押す。

男が何気なく見上げたドアの上にある案内板の内容を信じるなら、地下1階にテナントは入っていない。暫しの待ち時間の後扉が開く。

エレベータから降りた男の前には無味乾燥なビルの廊下がある。

向かって左手にトイレや給湯室といった水周りが固まった領域がある。廊下はビルの壁面に対してL字型になっているようで、その内側にテナントが入るスペースが確保されている。エレベータの正面は廊下の幅が若干広めに取られており、エレベータホールと呼べないことも無かった。

エレベータから降りた男の正面には壁しかなかった。煌々と蛍光灯に照らされる廊下の明るさは、手入れされた光の安心感ではなく、寧ろ冷たい拒絶を男に感じさせる。

男は少したじろいだが、向かって右手、奥に向かう廊下を歩く。

暫し進むと、左手に扉を見つけ、男はそれをノックした。2回、空洞音が響く。

「どうぞ。」

内側から響いたのは女性の声だった。それも、随分若い。それに男は驚き、扉を開けることを躊躇う。

「どうぞ?。」

暫しの後、扉の向こうから再び女性の声が響く。ノックがあつたのにも関わらず人が入ってこない事をいぶかしんだのだろう。

意を決したように男が扉を開く。部屋の中は意図的か、或いは偶然か、廊下より一段暗い。それは男がイメージする非合法行為に適っていたので、彼は寧ろ少しほっとした。

「よかった、幽霊かと思いましたよ。待ち合わせに使うビルの変更をまじめに検討しました。」

がらんとした部屋は、扉の対面に設けられたカウンター以外に一切のものが置かれていない。壁面さえ、入り口から向かって左側、カウンターの少し手前に設けられた扉以外、一切の変化無く平坦だ。

「白川 雄一さん、ですよね?。」

扉の向こうから現れた男を、室内の女性はそう呼んだ。

長い黒髪を洒落つ気の無い茶色のヘアゴムで後ろに結び、フード付きのパーカーを着ている。その下に着たシャツの胸元には大きな柄がプリントされていた。何かのキャラクターかもしれないが、白川と

呼ばれた男にそれを判別することは出来なかった。

「はい、予約していた白川です。」

女性の呼びかけに、男、白川が答える。

「よかった。」

そう言つて女性はあからさまにほつとした表情を浮かべた。

「ところで、先ほど部屋に入るのを躊躇われたみたいですけど、どうしたんですか？」

先ほどの白川の行動を、女性が尋ねる。

「あ、いや、まさか女性の声があるととは思つていなかったの。」

それに白川は正直に答えた。彼の想像ではこういうとき聞こえてくる声は男のもの、威圧的か、或いは冷たい印象を与えるような、そんな声。

勿論それは彼が勝手に抱いた幻想であり、一切の根拠はない。

「ああ、それは確かによく言われますね。らしくない、つて。」

白川の返答に女性は特に驚いた風も無く返す。

「雑貨屋『マツリ』のオーナー兼デザイナー兼販売員兼その他諸々を一人でやってます、永谷 南帆と言います。」

その名前に白川は聞き覚えがあつた。彼が注文の為にこの店とやり取りをした相手の名前だ。

「ちなみに、この店では『私』の雑貨は取り扱ってないんで、宜しく。」

なぜか私、の部分を強調して永谷が言う。

暫し間が空いた。それは、お互いに会話の切欠を探しているような間の空き方だつた。

「すいません、余計なことと言いましたね。」

その後、永谷が謝る。自分の発言が場の空気を氷付かせてしまったことを、だろう。

「ああ、いや、私もどう返していいか解らなくて。すいません。」

それに白川が謝り返す。

彼は戸惑つていた。自分が注文した商品の質に対して、この場所で行われるやり取りの質に。これではまるでオーダーメイドした商品を普通に取りに来ただけのようではないか、と。

「注文の確認だけしますね。」

少し意識をして、永谷は事務的な口調と声を出す。緊張と戸惑いを抱えている白川からすれば、そのほうがやりやすいだろうという判断だったが、それはほぼ的を射ていた。

「ああ、はい。」

白川が返す。

永谷はカウンターの下からバインダーを取り出し、その上に乗った紙の内容を読む。

「注文は眼球のストラップと、頭髮のミサンガで宜しかったですよね？」

「はい。」

白川は小さく頷いた。

「では先に代金をいただいて宜しいですかね。」

バインダーの上の紙をめくりながら永谷が言い。

「成功報酬が、税込みで140万と4千円になります。」

そう続けた。

それを聞いた白川は、自分の背負っていたショルダーバックを体の正面に持ってきてからその口を開け、中から封筒を1つ取り出す。

「300万入ってます。」

それを永谷に渡しながら、白川が告げる。

受け取った永谷がそれを開けようとする、封筒の口に封がしてあった。

「律儀な……。」

そうぼやいてから、永谷はカウンターの下からペーパーナイフを取り出し、慣れた手つきで開封し、封筒を逆さにして中身を取り出す。その後、出てきた万札を手で扇状に広げ、数枚ずつ数えていく。その手つきは銀行員のそれだった。

「300万円預かったので、159万6千円のお返しですね。」

万札の束を先に白川に返し、またしてもカウンター下から小さな金庫を取り出して、5千円札1枚と千円札1枚を取り出し、白川に渡す。

「あ、レシートはありませんので、悪しからず。」

カウンターの上に放置されていた封筒に白川が金を戻すのを見ながら、永谷が付け加える。

「はあ。」

この場所で、レシートを求められたことがあるのだろうか、と内心で考えつつ、白川は返事をした。

「では商品を取ってきますので、少々お待ちくださいね。」

言い残して、永谷は壁の扉を開け、その向こうに消えた。

手持ち無沙汰になった白川が周囲を見渡す。勿論見るべき場所などこの部屋のどこにも無く、すぐに白川の視線は空中の適当な点に固定される。それは白川が何か物思いに耽るときの癖だった。

彼は回想しながら、1つの気になる点をどうやって尋ねようか考える。それは、今回の商品の材料を、一体何人で分けたのか、という事だった。

事前に受けた説明の内容を信じるなら、白川が今回払った金額からして、恐らく10人以上の人と分け合ったことになる筈だ。別に嫌だ、というわけではなかったものの、出来れば具体的に知っておきたいと白川は思っていた。つまるところ、リスクを犯してでも彼女を手に入れたいと願った人の数、という風に白川には解釈できたからだ。それは、彼にとつて同胞と言い換えることも出来た。

「お待ちせしました。」

そんなことを考えている間に、永谷が扉の向こうから現れる。手には2つの箱を持っている。どちらも大したサイズではなく、普通に掌に乗るような物だった。

白川とカウンターを挟んで再び向かい合った永谷は、カウンターの上に2つの箱を置き、片方ずつその蓋を外す。中身はそれぞれ先ほど永谷が言った通りのものだった。つまり、眼球のストラップと頭髮のミサंगाである。

ストラップの方は直径2センチ程度。特になんのひねりも無く眼球である。吊るしたときの見栄えがよい様に、瞳から90度方向の強膜を貫くように紐が通っている。瞳のある面の反対側、本来なら神経が通っている筈の場所はあたかも強膜が張っているようになってい

る。

ミサンガは直径が5センチ程度。注意してみなければ違和感はない。ミサンガを構成する糸の質は全て同じだが、ベースの黒に対して、赤い幾何学模様が入っている。

「どうぞ。」

永谷が短く白川を促した。

その言葉を聞いてから、白川は2つのアイテムを1つずつ手に取り、それを矯めつ眇めつ眺める。その表情は美しい美術品を眺める人のそれだった。

「このミサンガに使ってるのはあの娘の髪だけ？」

興奮しているのか、言葉遣いが少し砕ける。

「はい、流石に黒1色では寂しかったので、染めたあと柄として編みこみました。」

「それと、このストラップの方はどの位の強度がある？」

永谷の発言に半分かぶりそうになりながら、白川が問う。

「一度開いた眼球に防腐処理を施してから、濁ってしまわないように水晶体を樹脂と交換しています。その後、同じサイズのプラスチック球に貼り付けてから、樹脂でコーティングしていますので、それなりの強度はあると思います。」

淀みなく、永谷が説明する。

「じゃあ後ろの穴は？眼球って神経が通ってるんだろ？」

「それは紐を通すときに切り取った強膜で埋めます。」

「ということは保存や強度の確保の為に使った樹脂性のパーツ以外は、全部彼女なんだね？」

「はい。」

そのまま暫く、白川が商品を確認するのを永谷は見ていた。

「気になって貰えましたか？」

暫しの間を空けてから、永谷が尋ねる。

「勿論。本当にありがとうございます、永谷さん。」

白川は永谷の問いに元に戻った口調で答えた。先ほどの自分の言動を思い返したのか、すこし苦笑いの様な表情を浮かべながら、2つ

の商品を箱に戻し、丁寧に自分のシヨルダーバッグへしまった。

「一応これで商品の受け渡しは終了ですけど、ほかに何か尋ねたい事があつたら今のうちにどうぞ。一応メールでの対応もしますけど、どうせなら面と向かっている内に解決できるのが一番だと思えますので。」

永谷の気遣いに、暫し白川は考え込む。

「じゃ、じゃあ幾つか。」

意を決したように白川は口を開いた。

「今回の『材料』作間 未和さんは、一体何人で分け合つたんですか？」

人の体に由来する材料を用いて、様々な商品を作成する雑貨屋『マツリ』の商品は一樣に高い。頭髮や爪など、材料の協力によって比較的低リスクに手に入れられるものならいざ知らず、眼球や皮膚、或いは手指などの所謂再生しない、ないしし難いパーツを使って商品を作成する場合、材料を殺害することが多い。

当然ながらその報酬は莫大な金額になるため、多くの場合、客が必要としなかつたパーツを競売にかけ、1人を殺した際の値段を数人で分け合つて負担するのだ。勿論、材料は散り散りになつて複数の人間に渡る事になる。

「守秘義務があるので誰に、とは言えませんが2人です。」

淡々と、永谷が答える。その数は、白川の想定よりはるかに少なかった。

「あの、用途は何でしたか？」

自分が必要としたのは眼球と僅かな毛髪だけ、もう1人は残りのパーツ全てを買い取つた筈であり、その金額はかなりの額になる。そこまでして、何のために手に入れたのか、白川の興味を引いた。と同時に白川の中で嫌な想像がされ、彼の顔に緊張が走る。

「ああ、食用ですよ。」

その答えは、白川が想像した最悪とは180度異なる方向のものだった。彼の表情から緊張感が抜ける。

「ああ、アダルトグッズにされたのかつて心配してました、もしかして。」

そんな白川の表情の変化を見て察したのか、永谷が言葉を続ける。「はい。」

白川は肯定した。少なくとも自分には手に入らないなら彼女の一部でも、と思っていた訳で、それを他の男に汚されるのはやはり抵抗があった。自分のように愛でるのであれば、それは彼女の美しさに惹かれての事と解釈できたので、まだしも抵抗感が柔らぐ。そういう意味で、多数の人間が分け合っていたのではと期待できる金額になっていたのは、白川にとっては救いだったのだ。多くのパーツが1人の人間に渡ったのでなければ、と。

「ダッチワイフみたいな使い方をする場合、顔が損壊した材料を使用することは稀ですね。たまーに首から上だけ別な人となつなげて、ニコイチで作ってくれなんて言う人も居ますけど。あれ結構接続面がグロいんですよ。」

事も無げに永谷が説明する。

「まあ今回引き取ってかれた方は確か若い女性、ってだけで食いついて来たんで、そういう性癖はないと思いますから、安心してくださって大丈夫だと思いますよ。」

「そ、そうですか。」

自分も大概だとは思っていたが、その上を行く人の話を聞いて、白川は世の中の広さを痛感する。

「そしてその話しぶりだと、私みたいな人は結構多いんですね？」

そのまま流れて、白川は2つ目の質問をした。

「ええ。」

あつさりと永谷は肯定する。

「でないと商売にならないですよ。同業者も結構いますしね。理由もいろいろです。亡くなった方を偲んで、とか、貴方みたいな動機の人とか、ファンだったあの人の、とか。」

「ファン？」

永谷の言葉の中に出てきた単語が気になって、白川は話の腰を折った。

「ええ、有名人が亡くなったときにだけ、その人を材料としたアイテム

が出回るんですよ。」

世界中でのスタンダードかどうかは置いておいて『マツリ』では有名人を材料とする依頼は全て断っている。リスクが高すぎる為だった。

「最近で一番マーケットが沸いたのは・・・マイケルジャクソン、かなあ。あの時は私も奮発して、競売に参加しましたよ。危うく首が胴体とバイバイしちゃう所でしたけど。結局暫く働かなくていい位の儲けになりましたから。」

「でも、死体の盗難なんて聞いたことないですよ？」

そんなことが起これば間違いなくニュースになる。それが白川の生きてきた世界の常識だった。

「いやいや、バレてないんで。」

顔の前で手を振りながら永谷が言う。

「霊柩車に乗った後の死体なんて、業者がグルになってれば幾らでもパクれますから。それこそ車内で棺桶開けますからね、奴ら。日本だと火葬場で摩り替えるのが一般的みたいですけど。骨になっちゃうともう誰が誰だかなんてわかりませんからね、背格好と性別だけ合わせりゃ問題ないみたいです。アメリカだと、棺桶空の有名人も居るかも知れませんか。霊柩車から出した後開けないでしようし。」

全く知らない世界の常識が、白川に知らされる。

「需要も大きいですから。誰かが身に着けていたもの、使っていたものをありがたがる気持ちの延長上に、遺体をありがたがる気持ちがある。今だって、遺灰を使って記念のアイテムを作ったりしてますから、もしかしたら今後、亡くなった人の体のパーツを使った作成は合法になるかも知れませんか。殺すのは絶対駄目でしょうけど。」

もしかしたら、元ワイフのダッチワイフなんて代物が大手を振って作れる時代が来るかもしれませんね、猫の毛皮をマルチコンピュータに貼り付ける時代ですし。」

後半は笑いながら、永谷は話す。

「だから、別に自分が異端なんて思わなくても良いと思いますよ。一寸時代を先取りしちやっただけですって多分。」

「ありがとうございます。」

自分がした質問の意図を察されて少し恥ずかしくなりつつ、白川は礼を言った。

「いいえ。他に何かありますか？」

「大丈夫です、ありがとうございます。」

礼とともに、頭を下げたから、白川は部屋の出口に向かう。

「ああ、最後に1つだけ。」

部屋の扉に手をかけたとき、何かを思い出したのか白川が振り返って問いかける。

「何で彼女の利き手を聞いたんですか？」

「それは、ナイショです。」

答えながら、永谷は微笑んだ。

無題

側面に「消費促進庁」と書かれた、やたらと丸みを帯びたデザイン
の1人乗り6輪車両の車内に儲けられたリクライニングチェアの背
もたれを限界まで倒した上に寝そべる1体のアンドロイドが、ほぼ真
球の頭部表面に赤いラインを灯らせている。その胴体にも、車体の側
面と同じように「消費促進庁」の文字がある。

頭部と同じように、人体を記号化した結果残ったような球と円柱を
中心に構成されたそのデザインは、端的に言って特徴に乏しく、ほぼ
真っ白のペイントと相まって、企業の象徴性にあふれたそれとは対照
的だ。一見、胴体の文字が無ければそれこそ何かの素体と見まごうよ
うなその機体は、しかし公的機関の所有するアンドロイドとして、社
会に広く認知されている。その特徴の乏しい機体の胴体に描かれた
文字列のみがそれらの所属する省庁を表し、また全く同じ形態であり
ながらその機能と性能の大きく異なる機体である事を示す。

消費促進庁のアンドロイドが乗る1人乗り6輪車両は、幹線道路を
法定速度ギリギリで走行し、暫くの後、右折して幹線道路から外れ、そ
れぞれの道で定められた法定速度をギリギリクリアしながら住宅街
へ入っていく。

やがて1軒の集合住宅の前で停まった車の中で、消費促進庁のアン
ドロイドが、頭部に灯ったラインの色を赤から青へ変化させ、起動状
態に移る。

消費促進庁のアンドロイドが、音も無く開いたドアから車外へ降り
た後、駐車違反を回避する為に1人乗り6輪車両が、無人のまま再び
発進する。それを態々頭を動かして見送ってから、消費促進庁のアン
ドロイドは集合住宅のエントランスへと入ってゆく。

エントランスに設けられたインターフォンに指を這わせ、自らが用
のある部屋番号を呼び出す。間の抜けた電子音の後、数十秒の間を空
けても、その部屋の主が応答する事は無かった。

それを受けて、消費促進庁のアンドロイドの頭部にある青いライン
のフチで緑色のラインがチカチカと明滅する。

短い通信の後、集合住宅の管理会社からマスターパスワードを取得した消費促進庁のアンドロイドは、12桁のパスワードを一瞬でテンキーに入力し、スイッチの入ったマイクへ規定のメロディを発する。尤も、それは人の可聴域を超えたメロディだが。マイクから、同じように発せられた認証のメロディを聴いて、消費促進庁のアンドロイドはエントランスを抜けてエレベータホールへと歩を進める。

ロックの外れた自動ドアが開き、既に待機していたエレベータが扉を開ける。乗り込むと、消費促進庁のアンドロイドは目的の部屋がある7階のボタンを押した。

暫しの後、目的の階で停止したエレベータから降りた消費促進庁のアンドロイドは、そのまま前進して、先程インターフォンに打ち込んだ番号の部屋の前へ到達する。

一応ドアノブに手をかけて回し、通常的手段でドアを開こうと試みるが、扉は開かない。

誰に見られているわけでもないのに、態々嘆息するような動作をしてから、消費促進庁のアンドロイドは、鍵穴の位置から検討を付けたデッドボルトの通っているであろうドアと戸の枠との継ぎ目へと当てて、握る。

たったそれだけの動作で、金属が擦れて破断される甲高い音と共にドアと、枠、そしてデッドボルトが握りつぶされ、鍵としての役目を果たさなくなる。

そのまま扉を開いて、消費促進庁のアンドロイドは室内へと押し入った。

「小野寺さん、この家におられるのは解っています。速やかに出てきてください。」

滑らかで有りつつ、合成音声だと理解できる声で、消費促進庁のアンドロイドは室内へ呼びかける。

「消費者へ、これ以上の実力行使を行う事を、我々消費促進庁は望んでおりません、速やかに出てきてください。」

言いながら、消費促進庁のアンドロイドは室内を検めてゆく。

程無く、玄関からリビングへ繋がる廊下沿いにあった一室の中で、

ドアに向けて鉄パイプを構える初老の男を消費促進庁のアンドロイドが発見する。

「寄るなっ!!」

扉を開けて、消費促進庁のアンドロイドが入ってきたことを確認した瞬間、小野寺が叫ぶ。

「このマシンはまだ使えるっ！交換なんて応じない!!」

小野寺の背後には、机と、その上に乗った1台のデスクトップPCがある。

「ですが小野寺さん、そのPCは既に使用期限を過ぎています。無償で新しいマシンをご用意いたしますし、システムの互換性も十全に確保してありますから、フルバックアップを行ったメディアをディスクトレイに入れた状態で起動していただければ、それだけで環境の移築も可能です。何故それを拒むのですか？」

言いつつ首を傾げて見せながら、消費促進庁のアンドロイドは一歩前進する。

「寄るなっ!!」

それを見て、再び小野寺が叫んだ。仕方なく、消費促進庁のアンドロイドは一歩下がる。

「キサマ等には解らんかも知れないがな、このマシンには愛着があるんだ、それをそんな理由で手放せるか！」

「しかし、そのマシンは既に製造から5年の年月が経っています。パーツの個体差もありますが、これ以上の使用は突然の故障に繋がる危険があります。小野寺さんの大切なデータを、そのようなリスクに曝すわけには参りません。」

消費促進庁のアンドロイドは、合理的で、大抵の人が納得できるような理由を並べた。

「そんな理由で納得できるなら、私はこのマシンをとうの昔に手放している、そうじゃないんだ！」

その表情と、口調から小野寺が強い興奮状態にあり、このままでは何をするか予測が付かないと判断し、消費促進庁のアンドロイドは代案を提示する事を決定した。

「わかりました、その『思いいれ』という物が消費者の皆さんにとって大事なものである事を、我々消費促進庁は重々承知しています。数日中に、P C 1台分の代替消費に関する案内が届くと思いますので、その指示に従ってください。また今後は、円滑な消費活動の為、このようなケースでは事前に役所への届出をお願いいたします。それは。」

それだけを言い残し、消費促進庁のアンドロイドは踵をかえす。部屋に残された小野寺は、拍子抜けしたようにぺたりと座り込んだ。「扉については、30分もしない内に代わりが届きますので、ご心配なく。」

玄関から、合成音声がさも当然の様に、そんな事を言い残して行った。

無題

高速道路の両サイドに立てられた明かりは、一定のペースで視界の中を通り過ぎて行く。これが一種の催眠効果を発揮して、ドライバーの眠気を誘うとか何とか、一時期話題になった気がするが、もしかしたら気のせいかもしれない。そこそこ長時間のドライブ、ずっと助手席に座っている所為で僕の眠気は今最高潮で、もしかすると今しがたの雑学みたいなものも、そんな眠気を何かに責任転嫁するための都合の良い空想かもしれない。

仲の良い友人とは言え、流石に4時間も車内という密閉空間で時間を一緒に浪費していれば、話題というのは粗方尽きる。会話が弾んだのは最初の2時間位で、あとは延々車内の静けさをウォークマンの中に詰め込んだmp3に駆逐して貰っている。この車が凄いのか、適当な機器から出力した音声をちゃんと受け取って車内のスピーカーから流してくれる。この機能がなかったら多分僕らは沈黙と気まずさに負けていた。

「なあ、腹減らないか？」

不意に、隣でずっと車を運転していた友人が、声を出した。言われてみれば、確かに腹が減っている。思い出すまでも無く、僕が最後に固形物を口にしたのは今日の朝が最後だ。昼前にあんなことがあった所為で昼食を食べ損なったから、都合8時間近く何も口にしていない計算になる。

「いいね、おなかすいた。」

極めて単純に、同意を口にする。見れば、後5分程度の距離にパーキングエリアがある事を標識が告げている。もしかすると友人も、あれを見て空腹を思い出したのかもしれない。

見えたパーキングエリアの名前は見たことも無いやつだった。当然と言えば当然で、僕は免許を持っていないから、遠出するなら電車か飛行機で旅をする。新幹線は大きな街にしか止まらない。時間のかかるワープみたいだ。飛行機ならその時間も掛からない。

そういう旅を「味気ない」と批判する向きがある事をSNSで知っ

た。正直どうでもいいと思う。なんでも新幹線じゃなくて鈍行で行くから風情があるんだとか。歩いてろって感じた。

そんな風は無駄な思考を頭の中で転がしているうちに、車は本線から左にそれで、パーキングエリアの駐車場へ滑り込んで行く。今まで時速100キロ超で走っていたところから一気に3割以下まで速度が落ちる所為で半ば停まっているように感じるこの感覚が、僕は割と好きだ。

適当に駐車場を巡回して、車を止めるスペースを見つけ出すと、慣れた手つきで車を停める。

車が停止して、エンジンが停まってから、シートベルトを外して車外へ出る為にドアを開く。車内の調整された空気を割って、湿度と気温が若干高めな夜気が車内へ滑り込む。

一度大きく伸びをして、コリをほぐす為に軽く柔軟のような動きをしながら、並んでパーキングエリアの建屋へ向かって駐車場を横切る。さつき停まっているようだと言った車達が、やっぱりいつも通りの速度で、僕らの横断を鬱陶しそうに待っている。

晩飯時より少し早い時間帯のお陰か、割りに座るスペースのあるフードコートを見渡して一安心した後、入り口の正面にある券売機で食券を買う。僕は醤油ラーメン、友人はチャーシュー麺と餃子を頼んだ。

2人分の注文をカウンターで纏めて済ませて、ベルを貰って席に着く。僕よりちよっと送られて席に着いた友人が、僕の前に水の入ったコップを置いた。

「有難う。」

礼を言っただけで1口口を付ける。

「結局何処まで行く事にするんだ？」

そして、この目的地の無い旅の目的地を訪ねた。

「あと2時間位走ろうと思ってる。そしたら下道に下りて適当な場所を探そう。」

友人は淀みなく答えた。そうすると、地元から6,700キロ離れることにしたという訳だ。県を幾つか跨ぐというのも、中々悪くない

選択に見える。

「帰るのは明日の朝かあ。」

そして、その移動時間から僕らが次に地元のを踏む時間を計算して、僕は嘆息した。

「オマエよくそんな考えかたが出来るな・・・」

そんな僕を見て、友人はあきれれる。そんなに特殊だろうか？

「だってさ、元の日常に戻る為にこんな事してる訳じゃん？」

言外に『だったら今後のことを考えないと。』というニュアンスを滲ませながら、喋る。

「まあ確かにそうかも知れないけどよ。」

今日の朝まで、この友人は中々肝の据わった男だと思っていたが、ここ半日ほどでそのイメージは大分変動している。いや、もしかするとおかしなのは本当に僕かもしれない。多分彼は、一般的な人生の範疇ではちゃんと肝の据わった男で居続けることが出来ただろう。

その辺のフオローを入れようかと思っただけで、手元の機会が適当なメロディを流す。カウンターに眼をやれば、ドンブリが2つ、嫁ぎ先を待っている。

ほぼ2人同時に席を立って、ドンブリの載ったトレイを受け取る。僕はそのままプラスチックの箸と、レンゲを持って席へ戻る。友人は頼んだチャーシュー麺の上から、ドバドバと胡椒をかけている。序でに餃子の器に設けられたスペースに、餃子のタレとラー油をしこたま入れてから、席に戻ってきた。どうも友人の味覚は刺激的な方向に針を振りすぎているくらいがある。

キッチンと手を合わせて「頂きます」を言ってから食事を始める。毎度思うのだけど、こういうお店で出されるラーメンの麺は、決して手が込んである訳でもないのにこんなに美味しいんだらうか？いや、多分僕の舌が馬鹿なだけだろうけど。正直、サービスエリアやパーキングエリアのフードコートで振舞われるラーメンって、普通に美味しいと思ってしまう。ただ、こういうお店のチャーシューはあんまり好きになれない。何か独特な匂いがする。尤も、目の前の友人はそのチャーシューが沢山載ったラーメンを好き好んで食べている訳だか

ら、多分この匂いこみでこのラーメンが好きな人も沢山居るのだろう。

お互い殆ど会話が無い。まあそりや今日1日、結構疲れている。正直今晚徹夜して明日学校に行くのは普通に憂鬱だ。ただまあ、厄介事は早めに片付けてしまいたいという友人の心理もよく理解できるので、こうしていま付き合っている。

ただ、個人的な意見を言わせて貰うなら、別に今じゃなくても良かった気がする。事件そのものが露呈するのは時間の問題な訳だけど、1人暮らしの彼が居なくなつたことに気付くのとて、結構経つてからだと思う。特に彼は遊び歩くから、結構頻繁に家を空ける性質だったし。

まあ友人がこういった有事に対していつもの胆力を発揮できないことを織り込んで事に当たれなかった僕の責任でもあるので、ここは泥というか面倒を被ることにする。

思えば最初の2時間、やけに饒舌だったのも、ある種不安を和らげる為の行動だったのかもしれない。そう考えると、なんだか納得がいく。大方、僕が予想以上にいつも通りなのでそれが却つて不安をおつたのだろう。結局口をつぐんでしまったところを見るに。

などと考えながら、黙々とラーメンを食べる。正面の友人も、食欲は健在のようで、いいペースで頼んだメニユーを消化している。この辺は肝が据わっているんだが、もう一步届いてくれないものか。

もう殆ど残っていないラーメンの、最後の1口を、スープをかき回しながらレンジに追い込んで食べる。餃子1皿分早く食べ終わるかと思つたら、殆ど同着だった。

残った水を飲みながら、暫しゆっくりとして席を立つ。いつの間にかフードコートは結構混んでいて、パーキングエリアの建屋を出ると、駐車場も一杯だった。丁度いいタイミングだったかもしれない。

歩いて車へ戻る。

「ちよつと荷物確認しても良いか?」

運転席へ入ろうとする友人へ、一言断りを入れた。

「いいけど、見られるなよ?」

ちよつと挙動不審に周囲を見ながら、友人が答えて、鍵を寄越した。その様子がおかしくて、少し笑いそうになりながら、車の後部へ回り、セダンのトランクを開ける。

中にはビニールでぐるぐる巻きにされた死体が転がっている。遠目に見たらゴルフバックか何かに見えるかもしれない。

包装を解いて、中身を見る。濁った目の女性が、此方を見た。死斑が出ているが、死後硬直は解けて来た。運搬と解体は大分楽になりそうだ。

結構美人で、アイツは相変わらず見た目のいい女性を捕まえるのが上手い。ただ、今回はちよつと中身の選定を誤った。まあ自業自得でこと。

薄皮みたいなコンドームをつけなかつた所為で、ここまでに2人、これから1人と1台が無駄になるのだから、やつぱ避妊って大事だ。僕に将来彼女が出来る事があつたらちゃんとしようと硬く心に誓いつつ、トランクを閉じる。目下の心配は帰りの足だな。ヘタすりや明日の講義はサボらないと。

無題

玄関の前で、ポケットを叩く。前と、後ろ。それぞれ2つずつ。出かける前の癖だ。

どのポケットに何を入れるか決めてあるので、それぞれを叩いたときに、あるべき物の感触があるかどうかで、忘れ物をしていないか確認できる。一通りあることを確認し、靴を履き始めた。

「どこ行くんだ？」

玄関から少し離れた居間から、同居人が声をかけてくる。ポケットを叩く音で、私が出かけようとしていることを察したのだろう。

「散歩。」

振り返って、短く答える。

それを聞いて、同居人の顔が引つ込む。別に付いてきたい訳でも、買ってきてほしい物があるわけでもないらしい。

ではなぜ声をかけたのか訝しみつつ、靴紐を結ぶためにしやがむと、背中になにか硬いものが当たった。振り返って見ると愛用のライターが転がっている。

「忘れもの。」

最近寒かったから、コートの中に入れるようにしていたのを忘れていた。家から出た後でもう1回戻ってくるようになっていただろう。「ありがとう。」

礼を言って、拾う。

煙草の箱は右前のポケットに、携帯灰皿は右の後ろポケットにしっかり入っているくせに、ライターを忘れるあたりがなんとも間抜けだ。結局洋服のどのポケットに何が入っているかが正しければ問題ないとしているから、着るものが変わると忘れ物をする。季節の変わり目はそれが多い。

玄関に掛かっている、予備のコートを羽織り手に持ったライターをポケットへ滑り込ませた。先日の雨で濡れてしまったコートを、居間に吊るして乾かしていたことが今回の忘れ物の原因になるのだろうか。あるいは先日の雨が。いや、天気予報を見忘れて傘を持っていか

なかった私が悪いのか。結局ぐるりと一周して私の元へ責任が帰ってきた。

そんな益体もない思考を回している内に、靴紐が結び終わる。

「行ってくる。」

振り返って言った私の言葉に、同居人の手だけがひらひらと答えた。

玄関の扉を開けて、外へ出る。すでに夜の気温はかなり低く、きつちりと服を着込まないと辛い。いい加減外出するのが辛い季節になつてきた。

ポケットから煙草を取り出して口に咥え、火を点ける。深く吸い込むと、舌先に甘い痺れが走った。

玄関先でぼさつと立って煙草を吸うのも馬鹿らしいので、宣言通り散歩へ行く。特に目的もないが、多くの場合通るコースは同じだった。大体2、30分で回り、その間に煙草を2本ほど吸う。

そのコースに従うともなしに従いながら少し歩いて、いつもと違う曲がり角で折れてみた。深い意味はなく、単純に気分だ。

煙草の効果などというものはさほど高くなく、別にそこまで強烈に気分を変えるような薬じゃない。そうだったらとくに国の規制対象になつている。だからこそ、煙草を吸っている間の行動というのは、煙草の効果を決定付けるかなり重要な要因だと思う。だから、これを口に加えている間は、気分に従うことにしている。

「何があんのかね。」

誰にもなく呟きながら、歩を進める。一息吸って、少し燻らせ、吐く。数歩歩いて、また一息。

同居人は別に嫌煙家と言う訳ではないのだが、家での喫煙は禁じている。理由は単純で、壁紙を汚したくないのだそうだ。退去するときにも取られる。

もっとも彼女はそこまで煙草を吸わない。本当に、外出の次いで、移動時間の暇つぶしのように煙草を吸う。だから、1日家にいる休日にわざわざ煙草を吸うために外出する必要はないのだが、私は違う。

勿論、ベランダへ出て吸うというのも1つの選択肢だろうが、なん

だかそれは好みじゃない。煙草を吸っている間の行動が煙草の旨さを決めるわけで、ただ煙草を吸うために、ニコチンを摂取するために煙草を吸うのは私の思う喫煙とは少し違った。

結局こうして1日に数回、煙草のために散歩へ出かけることになる訳だが、お陰で若干体重が落ちた。次いでに、このあたりの地理にも詳しくなってきた。勿論、歩いて出かけることのできる範疇なので大した範囲ではないが、しかし案外住んでいる街といえども細かいところまでは知らないものだ。

実際今も、歩いている間に見覚えの無い景色の中に居る。すでに煙草は2本目に突入しているので、おそらく15分以上は歩いているだろう。

正面に大通りが見える。ここまではほとんど真つ直ぐに歩いてきたが、あれを区切りにして曲がってみようと思う。今日の散歩は少し長くなりそうだ。大通りなら、何か店があるだろう。何か買って帰っても良い。

ああ、おでんが食べたくなってきた。

無題

平日の午後6時近くという時間、どの局もやっている番組はニュースか子供向け番組で、正直退屈極まりない。

とは言え家事も全て済ませてしまいやる事がないのも事実で、凄惨とスキヤンダルをない交ぜにしたニュースと、どうせ行くことの無い遠方にある行列の出来る飲食店、今話題のダイエット法なんかに関する特集が組まれた特に何の役にも立たないワイドショーを眼球と耳から脳へ流し込む。こんなものでも話の種にはなるだろうか。

ちらりと時計を見遣る。時刻は17時47分。定時に退社していると仮定すれば、あと15分前後で帰宅してくるはず。

普通の家であれば夕食の準備をしているべき時間だが、如何せん退社時間が定まらないのでそれも少し難しい。勿論、全て完成させて食べる時暖めなおせば良いのだろうけど、それには心理的な抵抗があった。幼い頃の自分が置かれていた家庭環境に原因があるかもしれない。

結局、折衷案的解決策として暖める事無く食べるものは完成させ、暖めて食べるものは熱を加える直前まで調理手順を進めておくことにしている。

帰ってきて直ぐ食事を取りたいときは、最寄り駅に着いたときにメールをするように言い含めてあるから、後は此方で調節できるシステムだった。

目の前のテーブルに置かれたスマートフォンを手に取り、メールと着信のチェックを行う。着信はいずれもゼロ。時間的にも既に最寄り駅についていておかしくない時間なので、今日メールが来る事は多分無いだろう。

そう思つてスマートフォンをテーブルに置いたタイミングで、インターフォンが鳴る。弾かれたように立ち上がった。

小走りになりながら玄関へ行き、鍵を開ける。ドアノブが外側から回つて扉が開き、待ち人が顔を出す。

「ただいま。」

軽く笑いながら帰宅の挨拶をした薫へ僕はテンプレートに。

「お帰り。」

と返した。

薫は家の敷居を跨いだあと、革靴を乱暴に脱ぎ玄関から室内へ上がった。プラスチックがフローリングを打つ硬質な音が響く。普段より足音が荒い。疲れているのだろうか。

「アポとっていった相手先の会社が駐車場無くてさ、結構歩かされたんだよね、辛くって。」

そんな僕の心配を察知したわけでは無いだろうけど、薫がその理由を解説する。成程。常人にとっては何て事の無い仕事でも薫にとっては辛い。

「外せ〜」

ソファアールへ身を投げ出すように座った薫が、僕に要求する。

「はいはい」

答えながら、奥の和室にある筆筒からタオルを取りだし、彼女の正面に回る。

軽く足を開いて座っている薫がはいているのはタイトスカートなので、服を脱がさずとも薫の要求を満たす事は出来る。出来るけども。このまま作業を始めるとなると絵面が、その、ね？

「え〜つと、正気？」

問わずにはいられない。

「勿論。」

そうですか。

それ以上何も言わずに、義足を外しにかかる。

半分以上スカートに手をつ込んで作業を始める。鼓動が速くなって、顔が赤くなっているのが解る。自分だけ照れている事に決まりの悪さを覚え、あえて顔は上げない。

薫の両足を勤めている義足そのものは何かで体に固定されているわけでは無いので、太腿の断端を覆うカバー状の部分を手で持って引っ張って外し、シリコン製のライナーを取って、露になった断端を軽くタオルで拭う。

ライナーは明日までに洗っておかなければならないので、それらを
一先ず風呂場へもって行こうと立ち上がった所で、耳まで真っ赤に
なって俯いた薫が目に入る。どうやら僕が実際に作業を始めた所で
照れたらしい。まさか自爆しているとは思わなかった。

かける言葉が思いつかなかったなので、そのまま風呂場へ歩く。それ
ぞれ清掃をしなければならぬがその前に。

「正広、ゴハン何？」

薫から食事の催促が入る。

「少し待って、掃除するから。」

特に今日は長い距離を歩いたらしいから、少し念入りしておかな
いと。

「解った、なるべく速めにね。」

時間が遅いのは事実なので、少し急いでみることにする。僕だっ
てお腹が空いた。

掃除、と言ってもそんなに大変なことは無い。

給湯器の電源を入れて、蛇口をひねり出て来る水が温水になるまで
待つ。ライナーを温水で濡らしてから、石鹼を手で泡立てて全体を洗
う。

外側の洗浄が終わったら、今度は石鹼を袋状のライナーの内側に入
れて温水で満たす。水中の石鹼を手でこすって泡だて、石鹼水にして
から石鹼を取り出し、ライナーの口を手で絞ってとじて振る。あとは
中をすすぐ。

そのあと、ライナーが濡れている内にベビーオイルを適当に垂らし
て全体に塗り伸ばしたら、吊るして乾かす。

手洗いなのは確かに面倒だと感じる人が居るかもしれないが、実際
かかる時間は大したことない。

手を拭きながらリビングへ戻り、ついでに薫へタオルを渡す。

「ん。ありがと。」

短く礼を言ってから、薫が足をタオルで拭う。汗で濡れて気持ち悪
かったはずだ。

それを見てから、キッチンへ。コンロの火を入れる。

完成した料理を温め直すのには抵抗があるが、スープの類なら特に抵抗を感じなかった。多分元々そういう料理だという認識が自分の中にあるせいかもしれない。

今日の献立はロールキャベツだが、ポトフに近い。火を通した所で調理を止めたので、あとは本当に暖まれば良い。

温めている間に残りの調理を終えようと、戸棚の中からバゲットを取り出して切り分ける。それをキッチンペーパーを敷いたバスケットに移す。

あとは、冷蔵庫からサラダにする予定のレタスとトマト、それからキュウリを取り出す。

時折フライパンの中のロールキャベツの様子を見つつ、野菜をそれぞれ下処理してボウルに盛る。

サラダ用のトングを食器棚から出して、大体食事の準備は完了だ。

ロールキャベツを深めの皿に移して盛り付けた後で全ての料理と取り分けるための皿を食卓へ持って行く。

「おお、ロールキャベツだ。」

僕が持つていった皿の中身を見て、薫が声を出す。

「そう。この間食べたいって言っていたでしよう?」

まあ見ていたのは何処かのレストランのメニューだったから、僕が作ったこれでは見劣りするかもしれないけれど。

「覚えててくれたんだ、ありがとう。」

ただ嬉しそうに答えてくれる薫を見ると、そういう暗い考えは払拭される。こうやって素直に喜んでくれるから、こちらだっているろしてあげたくなる。

「いただきます。」

「召し上がれ」

食事を終えて、片付けを始めるのだが、その前に1つ薫に尋ねる。

「お風呂、すぐ入る?」

僕も彼女も湯船に浸かる習慣を持たないので、風呂に入るタイミングは本当に気分だ。

「んー、そうしようかな。」

僕は彼女が床を這う彼女を見たくないの、彼女が風呂にいつ入るか、尋ねることにしている。

すぐに入るといふ返答だったので、彼女を抱え上げる。両足がないのでその体重は成人女性としては異例の軽さだろう。僕みたいに非力でも、とりあえず抱え上げることは出来る。

風呂場の扉を開けて、浴室のイスに彼女を腰掛けさせる。服は一人で脱げるので、後は僕がすることといえば、バスタオルをバスマットの上に置いてあげることだけだ。

シャワーヘッドは元々低い位置に置いてある。

基本的に、彼女が家の中で移動する時は僕が抱えている。それは、家ではなるべく義足を外していたいという彼女の意志と、彼女が床を這う姿を見たくない僕の意志とを尊重した結果で、両者ともにそのことへの文句は一切ない。

ただ、今は室内だから彼女が床を這って移動することの不都合は僕の感情的な理由を除けば殆ど無い。

彼女の足は太ももの半ばぐらいまで残っているの、扉を開けることも出来る。実際、僕と結婚するまで実家ではそうやって移動していたそうだ。

しかし、これが屋外だったら。彼女は義足がなければ移動に大変な苦労を強いられる事になる。義足の着脱、手入れは彼女1人でやるにはかなり大変だ。

僕が毎日、彼女の義足を外す度、彼女が出来なくなること、想像し、僕に頼るしかなくなることを想像して少しだけ暗い優越感を覚えていることを彼女が知ったら、彼女はと思うだろう。

彼女がこの家で義足を外すことを選ぶのは、僕への信頼があるからだ。それがとても嬉しくて、僕は彼女が出来ないこと、苦労している事を探している。

多分僕は、彼女に頼られたい。

無題

頭に少々白髪が目立つ中年の男性が、テレビ画面の向こうでさも知ったような顔で実際はよく知りもしないであろうことを朗々と喋っている。

「いやあ、でもいいんですかね？ 幾ら国土防衛の為とは言え、幾らなんでも道理に悖るでしょう…」

画面右上には目立つ配色で「無人兵器の嘘、衝撃の正体!!」なんてテロップが表示されていて、長い机に横並びになって座る複数名のコメントーターと、その向かって左端のキャスター達は揃って暗い表情を浮かべている。

きつとテロップの論調が違えば、彼らの表情はまた変わってくる筈で、簡単なテキスト打ち込んで居並ぶ連中の表情をコロコロ変えられたらそれはそれで楽しそうだとか、益体もない想像が頭の中を一瞬よぎった。

「幾ら軍に遺体を供出した人のものとはいえ、人間の脳を兵器の処理中枢に据えているわけでしょう、その人が望んだかどうかとは一切関係なく、延々戦わされ続けるなんて、私は嫌ですなあ。」

別のコメントーターが発した言葉に、他の出演者たちが深く頷く。先週の半ば頃から世間を賑わせているニュースの内容は、単純に言えば国境線の警備用に配備されているドローンの内、小隊及び分隊指揮を行う機体の処理中枢に、軍へ遺体を供出した人の脳が用いられているというものだ。

まあ軍属の人間の間では別に驚くようなことでもないし、そもそも技術自体秘匿されていた訳でもなんでもないのだが、いろいろそういう部分に敏感な人が騒ぐのを懸念して、あえて大つぴらにはしていなかったのが却ってまずかつたらしく、その彼らが言う「真実」は、テレビ、ネット、新聞等あらゆる媒体でいつそ清々しいほどに騒がれた。

技術自体の内容は殆ど調べないままに上っ面だけを見て騒ぎ立てるものだから、考えうる限りありとあらゆるデマが出回り、今じゃ当該技術を使ったドローンはパニックホラーに登場するグロテスクな

生物兵器と殆ど同じ扱いだ。

と、この先どんな頓珍漢な彼ら流議論が白熱するかと期待していたら、いきなり画面が真っ暗になった。

振り返ると、自分がソファの肘掛けに置いておいたりリモコンを持って、同居人の黒崎が立っている。

「日山、こんなの見てると馬鹿が感染するよ?」

呆れ顔で言いながら、リモコンをソファの前に置かれたテーブルの上に黒崎が決めた所定の位置へと戻す。

「その理屈が正しかったら、お前はとづくに手のつけられない大馬鹿野郎になってるよ。」

軽口を返しつつ、ソファのど真ん中を占領していた体を右端に寄せると、空いたスペースに黒崎が座る。

「全くさあ、どっかの誰かが態々“発見”してくれちゃった所為で、ボクら仕事は今や黒魔術師か何かと同じ扱いだもん、困っちゃうよ。」

なるほど確かに死体の一部分を用いて兵器を作るなんて、四半世紀前までならそれこそオカルトの領域か。

「残業おつかれさん。どうよ、作業の方は。」

このニュースが原因で、一度騒がれている技術を使ったドローンの運用を停止することが防衛省から発表されたのが今週の頭。それから5日、黒崎は毎日帰りが遅い。

勿論、開いた穴を埋めるのは人間の役割で、今週に入ってから週替りで国境警備任務へ小隊長として派遣される人のシフトが公開された。自分の初シフトは再来週だった。

「まあ一段落かな。防衛網に穴を開けないように人の大脳を使ったBPU搭載ドローンを帰投させつつ、それと並行して機体の休眠とBPUユニットの取り出しをほぼ24時間ぶっ通しでやって、漸くって感じだけ。」

行われている作業の内容自体は自分だって無関係ではないし、そもそも1日目の残業が終わって日付変更直前に帰ってきた黒崎の口からも聴いていたが、改めて聴くと一寸引く内容だ。

玄関からここまで来る間にキッチンの冷蔵庫から取り出してきた

の दौरान缶チューハイを両手に持っていて、片方を開けたあともう片方をこちらへ渡しながら黒崎が続ける。

「しかもこの後回収した全BPUの記憶領域のフォーマットと、各種プログラムの再インストールが待ってるし…。この後も暫くは残業続きかなあ。」

今回の騒ぎで問題になったのはBPU、正確にはBiological Processing Unitの製造過程における、脳の記憶領域の扱いだった。

現代においてBPU自体は特に問題なく利用されていて、街中で見かけるドローンの内半数ぐらいはBPUを搭載している。

結局、ある程度以上の柔軟な判断能力を要求される場合、ノイマン型コンピュータよりも非ノイマン型コンピュータのほうが処理装置として適当だったというだけの話なのだが、用いる生物の種類によって処理できる情報の型と量に優劣があった。

「そりゃ大変だ。まあ今日は週末だし、ゆっくり休め。」

黒崎に続いて開けた缶チューハイを、軽く黒崎が持っている缶チューハイに当てる。

「うん。今日は飲むよ。」

黒崎は大げさに缶チューハイを煽ると、無駄に据わった目で宣言する。

「じゃあ何かアテになるものでも作ってやろう。」

頭の中で冷蔵庫の中身から作れる料理を回しながら、ソファを立つ。大したものが残ってないから、イモやら肉やらの残りを適当に揚げ焼きにしちまおう。

揚げ料理は、油が温まるまでの時間がネックだが、それさえ何とかなるなら大量生産にかかる時間は短い。

「やったぜ。」

黒崎が一寸大げさに喜んで見せる。こりや相当疲れてるな。

手早く手を洗って、少し深めのフライパンに油を注いだ後ヒーターの出力を最大にしてから食材の下準備を始める。

「しかし、俺はいまいちよく分かってないんだが、BPUの製造時に記

憶領域のフォーマットが行われてないと何が問題なんだ？」

冷蔵庫から取り出した余り物のじゃがいもを一口大に切りながら黒崎に訪ねた。

「記憶領域の容量ってぶっちゃけ個体差があつてき。足りないalmazイからプログラム可能な領域を製造過程の一番初めに定義するんだけど、当然記憶領域事態は余るのよ。で、その余った領域に何が入ってるかって当然だけど生前の記憶なのね。」

ただ、仮に記憶が残っていたとして、自我事態はプログラム可能領域の中に構築しちゃうし、定義した領域の外側へのアクセスはしない作りになってるから、本当そこにあるだけなんだけど、それが倫理的にマズイんじゃないかって話。

万が一そこへアクセスすることがあつたとしても、記憶じゃなくて単なる記録だから、プログラムされたドローンの自我が何かを思うわけじゃないんだけどね。

まあとにかくそういう事を気にする人がいるみたいだから、じゃあ定義前に記憶領域全体を乱数データで埋めて、フォーマットしましようつてのが今回防衛省がした決定。

ただ人体を使うことそのものへの忌避感が世間に蔓延してるから、結局大した意味は無いと思うけど。」

「なんというか、本当に気の持ちようだな。」

正直そこを気にししたら、現状BPUを使用したドローンは全て真っ黒だ。いや、そもそも産業用のBPUに使用される脳って、特定個体の脳単体をクローニングして作っているから、生前の記憶と呼べるものが無いのか。

だとしたら、彼らの批判はそれなりに的を射ているのかも知れない。もつとも、的を射ているだけで射る的を間違っている気はするが。

「そう、本当に気の持ちようなんだよ。人間の脳単体をクローニングで作ってしまったら、態々フォーマットする手間もないのに、そっちはそっちで嫌がるしさあ。だからボク達技術者が、ひいこら言う羽目になるんだけど。勘弁してほしいよ、ホント。」

何というか、どれだけ技術が進歩しても、結局その技術の中身を理解しない人達によって、技術者は苦しめられるのだな。

実際自分も、世の中にある技術の中身を全て把握している訳ではないから、今は技術者と一緒に嘆く立場でも、一寸問題が変われば技術者に嘆かれる側になるのだろう。或いは黒崎も。

「しかしフォーマットと再プログラムが終わったら、お偉いさん方はまたそのドローンを実戦投入するつもりなんかね。」
「すると思うよ。」

ふと沸いた疑問を口にしてみると、黒崎からはあっけなく肯定の返事が返ってくる。

「日山は戦う側の人だから知らないかもしれないけど、国境警備ドローンって結構損耗率高いんだ。全体で年間約4割。BPU搭載の隊長格でも年1割今日がやられる。もしこのまま体調の役割を人間が担う状態が続いたら、確実に死者が出る。最終的にはその数字を出して、今生きている人のかわりに、遺体を供出してくれた方々の脳を使うって論調でまとめるんじゃないかな。」

「いい感じに感情論なのがポイント高いな。」

ある種のプロパガンダな気もするが。

「実際はそんなのじゃなくて、そこにあるのはただコストベネフィット分析から来る極めて合理的な判断だけだね。人間1人教育するより、脳みそ一個をBPUに仕立てて筐体に載せるほうが遥かに時間も金もかからないから。」

つまりそれは、ドローンのほうが自分たちの教育費より高くなる日があれば、その役割はこつちに回ってくるという意味でもあって、そう考えるとちよつと笑えない。

「まあ実際、人命が失われるようなことになればそれこそ国境警備部隊そのものの存亡にさえ関わるから、人とドローンの役割が変わる事はないと思うけどね。」

「そうかい。なら暫くの間は、俺等の呼び名が穀潰しから変わることはなさそうだな。」

国境警備部隊に若干名存在する人間の隊員は、普段穀潰し呼ばわり

されている。一応ドローンのみでは対処が出来ないデリケートなお客さんを相手にする時に攻撃しているのだが、そのお客さんの扱いはデリケートに過ぎるので公表されない。

今回のスキヤンダルは、そういう意味では漸くの出番と言えないことも無かった。

「どこでおつまみマダー？1缶空きますよ。」

黒崎は相変わらずのハイペースで酒をかつ食らう。あれで酔わないから彼女は凄い。

「そんなすぐ出来るかよ。もうちよいでイモが揚がるから、それ空けたら取り来い。」

「うえーい。」

つまみのイモにかけるミックススパイスを探しながら返答すると、黒崎が返事をした直後に缶の中に残っていたのであろう液体を飲み干すのが目に入る。

出来るから、飲んだら取りに来てであって、飲み終わったら出来上がる訳ではないのだが、今更それを指摘しても意味がない。

菜箸でイモを突いてみるが、まだ若干芯がある。仕方がないので戸棚の中に入っている乾き物を幾つか準備しつつ、黒崎のペースから今晚の酒盛りがいつまで続くかを考えた。

酒を買い足しに行くような事態にならなければ良いのだが。

無題

人は死ぬ間際、延命治療の手段として全身に種々の管を入れられ、モニタの為のケーブルが全身に絡まった状態に置かれる事がある。いわゆるスパゲティ症候群というやつだ。

今日の前にある遺体が死の間際そういつた状態を経験したとは考えにくい、とは言え現在保存のために複数のチューブを体に入れて防腐剤を注入されているのを見ると、それほどではないにしろ結局似たような状態になることに僅かな可笑しさを覚える。

様々な事情で表には出しにくい損壊を負って出来上がった遺体を、表に出せる状態に持っていくことを生業にする私にとって、今日の仕事相手は割合やりやすい部類に入った。

どうも手を下した人間が、私のような人間に幾らか配慮をしてきていたらしい。勿論それは犠牲者が自らの死をきちんと覚悟していたことも大きく寄与しているのだろう。

不意に、死後幾らか時間が経過しているため死後硬直がとけある程度の柔らかさを持った遺体に、防腐剤の循環を助けるためのマツサージを施しながらぼんやりと思いを回していた私の意識を処置室に設置された電話機からのコールが引き上げる。

作業の手を止めて電話機に近づき、手袋を外してから受話器を取る。見知らぬ番号からの電話だが、馴染みの客から紹介されてきた新規顧客かもしれない。

「もしもし。」

当然ながら名乗るべき店名のようなものは無い。

「あ、もしもし天笠さん？ワタシです。」

耳に心地いいソプラノの音が、ただ話しているだけにも関わらずまるで美しい歌声のような質感を伴って耳に入ってくる。

この番号にこれ程の気軽さでかけて来る上、こんな美声を持った女性などこの世界広しと言えども該当者は一人しか居ない。

「これはこれは、ミックス・フーガン。なにかご依頼ですか？」

電話機の傍らに置かれたスケジュール帳を開きつつ、ペン立てから

ボールペンを手に取る。直近のスケジュールはある程度暗記しているが、念の為確認もしておく。場合によっては受ける予定でいた仕事を断ることさえ考慮に入れつつ、どの仕事なら断っても問題になりにくいか目星をつけることさえした。

彼女からの依頼というのは、その規模での横紙破りが当然のように許容される。

「ハイ、突然で申し訳ないのですけどできれば天笠さんにお引き受けして頂きたい依頼がありました。実は今職場の前に居るのですけど、上がってもご迷惑ではありませんか？」

営業職の人間が『偶々近くを通りかかったので寄らせていただいた』なんて建前を口にするときの様な白々しさを載せて、そんな言葉が耳に入ってくる。

彼女が直接私の様な末端の作業者に合うことは極めて珍しい。それもどこかへ呼びつけるのではなく自ら出向くなど、ついさっきまでなら『ありえない』という選択肢に全財産と命をベットすることに何の躊躇もいらなかった。

勿論断る様な命知らずな真似をすることなどほんの一瞬も考えること無く承諾する。声が震えないよう細心の注意を払って。

受話器を置いた後、振り返ってエンバーミングテーブルに載せられた遺体を見やる。

作業をこのまま中断しても問題ないかだけぎつと確認してから処置室を出、エプロンの様になっている手術着を外し、マスクや手袋等と纏めて屑籠に叩き込んでから手を洗う。

彼女を待たせる事に恐怖が無いかと言えば当然嘘になるが、とは言えこの手の手順を守らないといつかどこかで痛い目を見ろというのは、医療に近い所を生業にする以上染み付いている。

準備室を出て普段書類仕事をするのに使っている事務室の様な部屋へ移動する。

殆ど作業場といっても良いこのテナントビルのフロアに応接室なんて気の利いた代物は存在しないが、仕事上のデータなどが入ったPCの乗った机で食事をするのに抵抗があったので事務所の隅にテー

ブルと一人がけのソファが用意されている。

ここ暫くは仕事が暇だったのでここで食事を摂っていないから薄汚れているだろうから、軽く清掃をして彼女を迎えようと決めて扉を開けると、既にそのソファに座って優雅に飲み物を飲んでいる女性の姿が目に入る。濁った呻き声を上げそうになりすんでの所で飲み込むことに成功した。

態々運んできたのだろうか、白磁の一見して高価だとわかるティーセットが持ち込まれており、ふわりと紅茶の香りが鼻腔をくすぐる。

私の入室など意にも介さず紅茶と洋菓子―果物をふんだんに使ったタルトだった―を楽しむその女性は、その優雅な所作につられてまるで絹のように揺れる細く美しい金髪と透き通った緑眼が印象的な、皮膚が泡立つ程の美女だった。

行動の突飛さにしろ美貌にしろ、噂には聞いていたがここまでとは。

「あら、お邪魔してます。どうぞかけてくださいな。」

一瞬前に感じた驚愕と恐怖を忘れ、見惚れて立ち尽くす私を見かねてか、彼女が声を出す。

それに曖昧な返事を返しながら、彼女の向かいにある一人がけのソファに腰を下ろす。中古のオフィス用品を扱う商店で員数不足の為格安で購入したソファとテーブルのセットに不足していたソファに。「砂糖とミルクはどうします?」

最早違和感などという言葉などでは表現のしようもないこの何から何まで間違った状況にあつて、嫌になるほど普通の質問に思わず叫びながら逃げ出したくなるが、その衝動をどうにかこらえ質問に答えるべく声を出す。

「いえ、結構です。」

個人的にはそもそも紅茶自体を断りたい位であつたが、彼女はそう解釈してくれなかつたようで、私の前に紅茶の入ったティーカップが揃いのソーサーに乗って置かれる。

そのまま流れるように机上の白い箱から自身が食べているのと同じタルトを取り、気づけばそこにあつた皿の上に置いてからフォーク

とともに私の前へ置いた。

タルトの方には一切魅力を感じないが、嫌な乾き方をした喉を潤すのに紅茶の存在はありがたかった。

油の足りない絡繰の様なきこちない所作でどうにか紅茶を口に運ぶ私のことを彼女は柔らかな微笑みを浮かべて見守る。

「ごめんなさい、驚きましたよね？」

私が一息つくことに成功したことを見届けてから彼女はそう言葉を切り出した。

「電話口では何度かお話してますが、実際にお会いするのは今日が初めてですね。」

そこから1分も必要とせず私に向こう10年分の驚きを纏めて提供した女性はそんな風に言葉を繋ぎつつ微笑んだ。

「早速ですけど本題に入りますね。私と雑談なんてしても貴方にとっては負担でしか無いでしょうし。」

言いながら足元の鞆を探り、1束の書類を私に差し出した。「仕事の内容はいつもとさして変わらないんですけど、扱ってもらう遺体はとびっきりの異常品なんです。」

受け取った書類をめくると、どうやら私に修復を頼みたい遺体の状態が記されている書類のようだ。添付されていた写真を見て絶句する。『とびつきり』という言葉に一切の嘘偽りはなかった。

仕事柄様々に損壊した遺体を目にするが、今までの人生で見た中で間違いなく最もおかしな壊れ方をした遺体だろう。いったい何を使ったら人体にこれだけ見事な切り欠きを作れるというのか。

それこそ写真を画像編集ソフトか何かで切り取ったかのように頭や手足の一部が切り欠かれている。

人体というのは様々な硬度や靱性を持った複数の素材が折り重なって形成される。それをこれだけ見事に、写真を信じるならば球形に切り欠く技術など、少なくとも私は知らない。

「これ、どの程度まで復元できますか？要望としては、遺族が遺体を棺の外から見た時に違和感を覚えない程度になつてくれれば良いのですけど。」

頭の中でその状態に遺体を持っていく手法を考える。常識的なやりかたで行くならこんなもの手の施しようがない。

「正直な所を言わせていただくなら、背格好をよく似せたマネキンに服を着せて、肌の出る部分は包帯かな何かを巻いて誤魔化したほうが間違いは無いですし安上がりだと思います。」

遠回しに『処置なし』と伝える。

「それは、そうなんですけど。私が個人的に故人と約束をしまして。極力遺体を葬儀に使いたいです。」

資料に載っている男と彼女がどのような関係だったのかなど知る由もないが、彼女ほどの人物がこれだけ手を尽くすからにはよっぽどの人物なのだろう。

「何とかありませんかね?」

権力や暴力ではない純粹なお願いに、これだけの強制力をもたせられる女性もそうは居ないだろう。

手を口元に持っていき、考える仕草をすることで時間を稼ぐ。

ここまでの振る舞いや言動から与えられた印象からして、彼女に関して私が耳にしたありとあらゆる噂、伝説と言い換えても良かったそれらは一切の誇張を含まない、いや、下手をすればかなり控えめに語られた事実だったのだろうと言える。

『有用な人間に対しては極めて友好的だが、そもそも個人として認識される事を避けるべき人物』というのが概ね彼女に関する評価だ。

勿論、彼女にとってのその他大勢として生きることは、知らず彼女の謀略に巻き込まれて命を落とすという危険を孕むが、そんなものは旅行に行く時登場する飛行機が墜落することを心配するに等しい。

尤も私は既に個人として認識されてしまっているので、何にせよ一定の利用価値を示し続ける必要がある。

「手足や胴体については、傷口そのものに覆いをしてシルエツトをごまかす事は何とかできるかもしれませんが。着せる衣服には幾らか制限が必要になるでしょうが。」

妥協案として何とか容認されそうなものを口にしていく。正直作業としてはかなり荒っぽい。

「ただ顔については諦めていただくしか無いと思います。」
何しろ頭の2／3は欠けてしまつて存在しないのだ。修復のしようがない。

「生前のお顔に似せてマスクを作り被せる位であればどうにかなりますが。ただこれだけ開口部が多いとどうしても防腐処理に難が出てきます。葬儀や火葬の方はいつ頃のご予定でしょうか？」

裸体を見られるならばともかく、上部分を外した棺に衣服を着せて入れることが出来るなら誤魔化す為の努力というのはやりようがある。が、腐敗というプロセスの進行を遅らせるのは中々に難しい。

「その辺はそちらのご都合に合わせてみましょう、技術的な問題もありますし。」

式場や火葬場というのは取ろうと思つたその日に取れるようなものではないのだが、そういった常識は彼女の前で障子紙1枚の強度すらあるまい。

「では、それをお願いします。いつ頃着手できますか？」

先程確認した予定を頭の中に浮かべて答えを弾き出す。

「今の仕事は今日明日で終わりますから、その後でしたら。次の予定はさほど難しく無いですし、貴女の名前を出す許可さえいただければ断りようは幾らでもありますので。」

驚きがようやく薄れてきたお陰で、普段電話口でしているときのよくな対応が出来るようになってきた。

「それは良かった。勿論、私の名前で断りを入れていただいで良いです。何なら根回ししましょう。」

わざとらしく手を叩いて喜びを示しつつそう言った後で、彼女は鞆から小切手を1枚切つてよこす。金額は書かれていなかった。

「必要経費と、技術料、それから特急料金その他諸々を合計したものにゼロを1つか2つ足して請求してくださいな。」

間違いなく口止め料を含んだ法外な報酬を約束しつつ彼女は席を立つ。

「では、着手日が決まったら連絡してくださいね。遺体を運ばせますから。」

それだけ言うと、見送りは不要だと行動で示すように自らドアを開けて部屋を後にする。走って部屋の外に出たとしても後ろ姿は見えないだろうという確信があった。

この仕事が終わったら、少なくとも半年は休暇を取ろうと心に決めつつ振り返ると、彼女が置いていったティーセットが目に入る。差し当たってこれの扱いをどうすべきか考えることから始めよう。

テセウスの船

いつか見たことがあるような気がする景色が、目の前にある。

自分が座っているのはパイプで組まれた、必要最低限椅子としての機能を果たすだけの丸イスで、天板すらスチールで出来たこれまた必要最低限の機能を持った長机を前にしている。

その机の上、自分の目の前には最早原型を留めないほどぐずぐずになった食材のペーストが何色か少しずつ盛られたランチプレートがあつて、私はそのペーストを適当に一色選んで最初から手に持っていたスプーンで掬って口に運ぶ。

口に含んだスプーンは私の唇にあたつてカツンと硬質な音を立て、その内側にある歯の替わりと言うには些か力不足な軟質素材が変形してスプーンの曲線に沿う。

それで表面のペーストをこそぎ取るようにして口内に収めたあと、舌を動かして少し味を楽しんでから嚥下した。殆どわからなかつたが微かに甘かつたような気がする、色からしてイモか何かかもしれない。

私の対面には同じように食事をしている人がもうひとり座っている。彼の口は私よりも簡素化されているのでチアパックの口を顔の下方、口というより顎に差し込んでいる。口内を陰圧にする機能は当然無いので、恐らく私の食事と殆ど同じようなものだろうペーストを、手でチアパックを握りつぶしながら流し込んでいた。

対面の彼は自分の身を包む軍服が覆っていない地肌、と言つてその殆どが硬質そうな素材できているがとにかく地肌の何箇所かに布製のパッチを当てていて、左腕に至っては外から見てもわかるぐらいひしやげた物をアームスリングに収めている。

普通に食事をしながら、意識の冷静な部分がこれを夢だと判断する。

ピントがボケた周囲の景色や、あまりにも静かすぎる環境がそう判断するだけの材料をくれたし、何より私と彼がこんな風に同じテーブルで向かい合つて食事することは最後まで無かつたはずだ。

「この腕、結局元に戻すんじゃないやなくて新しいのと取っ替える事になりそうだ。」

対面の彼が、チアパックを手で握りつぶしながらそう声を出す。口はもう声を出すための器官ではないので、物を口に含んだまま会話ができるのは、この体が持つ数多い利点の一つだ。

「へえ、良く完品が残ってたもんだ。」

私も、食事の手を止めずに答える。私が喋っていると言うよりは、録音した私の声が自分の喉から出ているような感覚があった。頭の中の冷静な部分は、この会話を何時したか思い出そうとのんびり思考を回す。

「いや、後方の倉庫にあったちよつと前のバージョンをポン付けするらしい。ジョイントの規格はどうせ同じだし、デバイスドライバだけダウングレードすりやとりあえず問題は無いんだと。」

その“ちよつと前”が一体どれぐらい前なのか正直検討がつかない。この軍の物資不足はここしばらく問題になっていて、その残り物は後方にある統合兵器開発システムによって頻繁に行われるアップデートの何バーション前の物になるのだろう。そんなことを考えながら気のない声で相槌を打った。

「で、序にトルソーの中身も幾つかチェンジだ。残り少ない生身の臓器が、また一個減っちゃう。」

彼が何故そんな怪我をしたのかよく知らないし正直そこまで興味があるわけでもなかったが、生身の部位が減るとい言葉が私の興味を引いた。

「あんたの義体化率、それで何割になる？」

「正直もう9割近いからな、誤差だ誤差。」

その誤差を惜しむのが私達のだが、彼は特に気にした風もなくそう言っただけだ。

「しかしまあここまで来ると、自分が怪我したのか、壊れたのかよくわかんなくなってくるな。」

続けた言葉は、私達がかかる特有の精神病の兆候を示していた。医学がここまで進歩して、人体を構成する器官の殆どを代替可能になっ

た現在でさえ、脳と精神を代替する技術にはまだ一定の課題があった。正確には最早倫理の問題に差し掛かりつつあったが。

「大丈夫か？最後にメンタルヘルス受けたの一体何時だ？」

心配した私の声を聞きながら、頭の中の冷静な部分が漸くこの会話をどこでしたかを思い出した。

転戦の為に一度後方へ送られる事になった時、輸送用のトラックと一緒になった際のものだ。それは戦友という言葉が権力を持つにはあまりにシステマティック過ぎ、また命が安すぎたあの戦場で会った友人と呼ぶには少し縁遠く、知り合いと言うには少し親しかった彼と最後にした会話だ。

「さあ、2, 3日前じゃなかったか？異常が見つかったって碌な薬はねえんだ、医者も匙を投げるさ。」

本来なら戦場で最優先されるだろう医薬品と食料は、私達のような兵士が戦場に蔓延るにつれてゆっくりとその需要を落としている。

「だいたいあんただって同じようなことを思ってるだろう？」

恐らくその質問に自身を持って首を、その構造上可能なら横に振ることが出来る兵士は1人も居ないだろう。

「俺達は本当に生きているのか？俺は何時まで死ぬる？」

そう言いながら俯いた彼は、かなり重度の症状を見せていて、私は今度このことをきちんと医者に告げ口してやろうと決める。患者が主治医に自分の症状を、特に精神的なそれを十全に報告することは難しい。

そして私は彼のその言葉を肯定することも否定することも危険な気がして、声を出すことが出来なかった。気まずい沈黙が場を埋めて、私達の会話はそこで途切れる。

少しの間を開けて彼が再び顔を上げた時、残念ながら表情がない彼の顔からはそれが何かを言おうとしたのか、或いは席を立つための予備動作だったのかがわからないまま、私の意識はなににかによって覚醒される。

夢の景色は急速に目の前から失せて、闇が目の前を覆った。

一体何が自分の意識を覚ましたのかを確認しようと首を回す。尤

も物理的な首は随分前になくしてしまつたので、今実際に回っているのは砲塔上部にあるキューポラ内部のカメラの筈、だ。

そうすると、視界の中に人の足が映る。どうやら私の身体に乗つかけているらしい。

攻撃を受けた際にその方向を判別する為付けられた装甲の感圧センサーが、私の身体のおちこちに何かを突き立てようとしている事を告げてくる。上に立っている人は何もしていないから、どうやら複数人で私の身体を弄り回そうとしているようだ。

慌てて自己診断プログラムを走らせて、自分の体が殆ど問題ないことを確認し精神の安定を回復した。

シーリング部品が少々経年劣化でくたびれて来ているだろうことをシステムは警告するが、それ以外の部分は何の問題もないらしい。15世代軍用義体の堅牢さに呆れる。

流石に砲塔上部のカメラでは私の身体の側面をその画角に収めることは出来ないので、足元の確認などに使用するサブカメラの映像に意識を回す。感覚としては首を自分の足元に向けた。

全身のおちこちに付けられたカメラの映像は、こちらの感覚に入力される前に人間が持つ視界の情報として正しくなるよう統合されている。存在しない感覚器を生来のものの様に使いこなす技術は、義体の形状が人体から離れるにつれて発展したものだ。

数人の丈夫そうな衣服に身を包んだ生身の人間が、DIYに使用するようなドリルでもって私の身体に穴を開けようとしていた。尤もその刃は全く立っておらず、うるさい音を立てながら無意味な回転をしている。

勿論切削加工が出来ない金属を装甲に利用するのは無理があるのですが、この装甲板だってそういう工具で傷をつけることが不可能だとは言わないが、少なくとも軍用の30mm徹甲弾さえ弾くようなこの装甲板に傷をつける工具が、携帯可能な電動ドリルに付けられる刃で傷つくことは無いだろう。

一応彼らも全く考えなしという事はないようで、装甲板の継ぎ目や、関節といった直感的に脆そうな部位を狙ってはいるので、シーリ

ングの類は幾らか削れているようだった。それが私の肉体に与える影響は殆ど無いと言い切つてよかつたが。

カメラに使用されているレンズや、砲口などの開口部に対して作業をしていないところから見て、彼らの目的は私の破壊ではなく鹵獲だろうと当たりをつける。

今直ぐに対処しなければ危険というわけではない事に安堵しつつ、現状に考えを巡らせてみることにした。

私の記憶が確かなら、私は所属していた国家の基地にある格納庫で休んでいたはずだ。

終戦と同時に行われた義体兵士の復体処理と、段階的除隊プログラムへの参加を断り軍用兵器兼職業軍人として居残ることを決めた私の肉体は基本的にその場所にある。

格納庫を出ることなど年に数回あれば多い方で、終戦から約半世紀分ある私の記憶の中で格納庫が出るのは毎年行われる国民向けのデモンストレーションの時のみというのが平均だった。

長期間のスリープに入った記憶もないし、そういうものに入ると通告された覚えもない。一応眠っている間に通告があったかもしれないことを考慮してローカルに保存されているログを漁ってみる。

驚くべきことにログ領域は全て基地の制御AIから送られてくる定期連絡で埋まっている。

近代のパーソナルコンピュータに比べればローカルのログ領域に割り当てられた容量など猫の額のようなものだが、それでもほんの数行で収まるテキストデータで埋め尽くすのには膨大な回数が必要になる。

嫌な予感、というか不安が鎌首を擡げ最新のメッセージに刻まれた日付を確認して意識が遠のくような錯覚をした。自分が最後に眠った日時はよく覚えていなくても、年と月ぐらいは記憶している、その記憶に致命的な間違いが無い限り、どうやら私は5世紀近く眠っていたらしい。15世代軍用義体の堅牢さに呆れ直した。

自分の周辺状況に改めて目を向ける。さつきは自分を解体しようとする人間のせいで全く目に入ってこなかったが、よく見れば周辺は

ほぼ森と言って差し支えない。私はそこにあるとわかっている。微かな人工物の残滓を見て取ることができるが、知らない人間はそこにあるものが自然の岩なのかハンガーの柱を支える基部なのか判別などつかないだろう。

記憶の中にある基地の見取り図と照らし合わせるように周辺を見遣る。殆どの建物は年月によって解体されていて、周辺には植物に侵食されたかつての同僚たちの姿も見えた。アレは多分もう動かないだろう。

幾つかの設備、特に砲台やレーダーの類は爆発物や銃弾によって破壊された痕跡がある。一体何がどうなってこの状況が作り出されたのか全く理解できないが、少なくとも現実になんてなっている。

と同時に、同僚が自然に還っているのを見て、なぜ自分がそうならなかったのかという疑問が生まれる。整備状況のログはメッセージとは異なる領域にログがあつたはずなのでそちらを開いた。

一体何故私が未だに意識を保っているのかを調べてみると、要は偶然だった。

物資補給が途絶した後にこの基地のメンテナンスシステムが行った同型機による共食い整備で最後に残った1機が私だったと言うだけだ。呆れたことに中枢神経ユニットさえオーバーライドされた形跡がある。

最終の整備ログは40年少々前の物だ。ということはこの体はほぼ半世紀野ざらしにされていたらしい。その条件で劣化するパーツがシーリングのみというのは、やはり呆れるほかない。一体何できているのか不思議だし、開発者はこの体がどこに置かれる事を想定して素材を選定したのだろう。戦闘用の肉体は経年劣化より戦闘で破損することのほうが当然多い。あるいは物理的、科学的攻撃に対する抵抗を上げていった結果副次的に獲得した耐久性なのだろうか。

つけないのがわかっていてもため息を付きたくなるような現実になんとも遣る瀬無い気持ちを感じながら、先ずは直近の課題を処理することに決める。

私の体に対して手持ちの物理的なアプローチでは一切効果が見込

めないことを確認したらしい彼らは、これだけ好き放題しても敵対的な反応を示さないのを良いことに私をそのまま持ち帰る事に決めたいらしい。携帯型、というには少々大きなジャッキをつかって私の足を持ち上げて車輪付きのウマを履かせようとしている。レッカー移動するようだ。

いつの間にか始動させたらしい彼らの乗り物は、装軌式のAPCと言って差し支えない物だったが、ずいぶん古い。

5世紀も前の軍事兵器が未だに生き残っているのかと一瞬想像して、直ぐに思い直す。ヴィンテージとして保管されている車両というよりは、むしろ形を真似て作り直したと行ったほうがしっくり来るくたびれ具合だ。

国籍不明の軍事車両を見て撃墜してやろうかという職業意識が芽生えるが、それを操る彼らは軍人に見えない。

盛んにお互い指示を出しながら作業を遂行する彼らの声にはティーンノ張りがある上、来ている衣服も作業着として適当であるという条件を満たしていること以外共通項が見られず、ついでに言えば視認性に対する思慮が足りない。パステルカラーの作業着を否定するつもりは無いが、ここが軍事基地だという意識は彼らにあるのだろうか？

いや、もう違うのか。私しか動ける兵器がないここを軍事基地と呼ぶのは間違いだろう。「元」という言葉がついて然るべきだ。

弾薬やエネルギーセルの類も集積されていたはずなので決して安全地帯と呼べる場所ではないが、見られる事によって危険度が増すことはあまりなさそうだ。

乗っている車両に搭載されている武装も見慣れた20mm機関砲だ。アレがまだ現役であることには驚きを禁じえない。というか、火薬を用いた射撃用兵装が主武装なのか。もしかして走行は圧延装甲だろうか。

仮にこの想像が正しければ彼らはトイガンで武装して本職の軍人に喧嘩を売っていることになる。まあ寝ている軍人を脅すならそれでも十分だったのかもしれないが、私が狸寝入りをしていることに彼

らが気づけなかったのが敗因だろう。

軍の所有物に対して鹵獲の意図を見せている以上撃ち殺されても文句を言う資格は無いが、状況がイレギュラーすぎて無警告での発砲を躊躇う。

先ずは紳士的に、警告を行うところから始めてみよう。対話によって情報が集められるならよし、無理そうならば撃破してしまえばいい。

状況への対処を勝手に頭の中で決定して、行動を始める。上官と呼べる存在が一切ない状態での軍事行動は慣れないが、命令が存在しない今、自分が行動不能にならないければいいだけなのでハードルは低い。

「当機は合衆国の所有物だ、貴君らの行動は窃盗に当たり、返答いかんによつては撃墜する。官姓名を述べよ。」

見るからに公務員ではない彼らに『官姓名』を問うたのは失敗だったかもしれない。

まさかこちらからアクションがあるとは思わなかったのだろう、いつそ笑えるぐらいの慌てぶりを見せた彼らは、悲鳴を上げながら車両に雪崩込んでいく。子供のときに飼っていたハムスターを思い出した。隠れ家を持ち上げたら、愛らしさと間抜けさが同居した顔を見せてくれるだろうか。

彼らが車両に乗り込みながら付いた悪態に『頭付き』というワードがあったのを確認する。自律兵器を指すスラングだった筈だ。

一応ある程度訓練をしているようで、素人よりは幾分早く車両に乗り込むと、急速発進しながら車体上部につけられた機関銃をこちらに指向する。どうやらやる気らしい。

一応想定はしていたので、車体前部にある機関砲を指切りの要領で放ち機関銃と片側のキャタピラを撃ち抜く。いきなり砲塔を撃たなかったのは過貫通を気にしたのと、殺しても得るものがないからだ。ものの数秒で無力化されてしまうことに憐れみを感じながらも、久々にエンジンに火を入れる。

先程行った自己診断の結果を疑うわけではないが、心持ちゆつたり

と立ち上がり数世紀ぶりに大地を踏みしめる。それに軽口を叩いてくれる同僚はもういない。

車体から生える六本の足を動かしてかく座したAPCに近づく。中にいる筈の彼らは何の動きも見せない。スピードを出して走っていたならば兎も角、発進中にキャタピラを撃ち抜いたのでさしたる衝撃は無かつただろうから、中で全員失神しているということも無いだろうに。

手が届くというところとちよつと語弊があるが十分距離を詰めてから右の前足を振り上げる。車体自体を大きく持ち上げれば、結構な高さまで足をかけることができるようになってるので、障害物を乗り越えるような感覚で右前足を使ってAPCを踏む。

力を入れつつゆつくりと体重をかけていくと、金属のきしむ耳障りな音を立てながら車体に変形していくのが見える。反動をつけなくても踏み潰すことはできそうだ。

「投降して車体から降りろ。でなければこのまま踏み潰す。」

その言葉と同時に大きく車体を軋ませる。

脅しとしての効果は十分にあつたようで、車内から先程まで私を解体しようとしていた者達が両手を頭の後ろで組んだ状態で降りてくる。投降の作法は習っているようだ。

降りてきた人の顔を改めて見てみると、一番年上でさえようやく成人したかどうかの年齢に見える。格好が軍装というよりアウトドア用の私服なので、休日を使ってサバイバルゲームにでも興じていると言われたほうがまだ納得できる見た目だ。

使っている兵器の見た目が旧式なことも相まって、競技中に珍しいものを見つけた学生に向かって実弾を発砲したのではないかという不安がよぎったが、どのみち犯罪であることに変わりはないと頭を切り替える。

APCから降車してこちらをみる彼らの表情は恐怖を浮かべてはいるが、それは国家権力に犯罪の現場を見られた事によるものよりどちらかといえば常識外の怪物に襲われた事に起因するように見えた。

状況の不可解さに無い首をかしげたくなりつつ、一応車体前部の機

銃を照準しながら先程した問を繰り返すことにする。

「私は合衆国軍義体機甲歩兵師団所属の兵士だ、周辺の状況からして私が稼働状態にあるとは考えていなかったのだろうが、だとしても情状酌量の余地はない。速やかに身分を証明できるものを提示しろ。」

若いとは言え十代後半だ、免許証の一つぐらいは持っているだろうと思つてそう質問したが、彼らからの反応は芳しくない。

気まずい沈黙が十数秒流れた後、彼らの中では年重に見える青年が口を開く。

「あんたが口にしてる『合衆国』が俺の知ってるそれと同じかはわからないけど、もしそうならそれはもう随分前に滅んだよ。今この大陸に国家と呼べるものなんて存在してない。」

そしてその口から語られた言葉は、この十数分で今までの人生分驚いた私を更に驚かせるに足るものだった。

「それは…いつの話だ？」

随分前、という表現の中に一体どれだけの時間が含まれるのか、薄々勘付いて居ながらも問わずにはいられない。

「さあ、少なくとも俺のじいちゃんとそのまたじいちゃんから聞いた話の中ではもう滅んでた。」

だとすると少なくとも200年ぐらいは経っていると見るべきか。

勿論、ちよつと考えれば日常的なスリープに入ったはずの私が50年ものタイムスリップをキメてしまった以上滅んでから5世紀近い時間が経っていないければおかしい。

私が居たこの基地は、都市部からかなり離れたスタンドアロンの防衛基地だ。あの頃には既に軍事物資の生産施設も大半はオートメーションになっていたから、滅亡の仕方によっては補給路だけ生き残る可能性はある。

私が定時の休眠処理に入った後目が覚める前に何かが起こり、覚醒処理が無期限延期になった後で再びそれを命じる存在が丸ごと消し飛んだりすればこんな状況にもなり得るだろう。荒唐無稽としか言いようがないが、実際にそうでもなければ説明の付かない現象に自身が見舞われているので適当な所で納得するしか無い。

そしてその事実を認知したことによっていよいよ私の行動方針が消し飛ぶ。

彼らの証言と、周辺の状況を統合すればまず間違いなく私は体感では一時に所属するコミュニティ、組織、そして国家の全てを喪失したことになる。

有機的な肉体を持っていた者たちであれば言うに及ばず、無機的な肉体を持っていた者たちでさえ既に死に絶えているだろう。

「先程、貴様らは『頭付き』と当機のことを称した。それは自立兵器を示すスラングだった筈だ。間違っているか？」

これからどうすべきかという少し大きな問題は一時的に棚上げすることとして、気になったことを聞き終えてしまうことにする。

私の問いかけに、代表として口を開いた青年は首を横にふることで私の問いかけを否定する。意味は変わっていないらしい。

「合衆国が滅び、そのような粗末な武装を使っている君たちがなぜ、自立兵器を知っている？」

明らかに技術のレベルに開きがある。

自立兵器の存在を、架空のものとしてではなく実際に対面しうる驚異として知っているならば、それに対処する武装として彼らのものはあまりに心もとない。

「国は滅んださ、でもヤツらは滅んでない。まだ作られ続けているし、IDの無い俺たちを攻撃してくる。」

それから彼は説明を始めた。ここまでのやり取りから何を推察したのかはわからないが、私のことを長い間家に閉じこもっていた世間知らずの人間だと感じたかのように、状況を語ってくれた。

詳しいことを説明できるだけの情報は資料としてはおろか伝聞の形でさえ残らなかつた為にその殆どは現状を語ったものだったが、足りない部分を保管する知識を私はいくらか有している。

その説明によれば、彼らは合衆国国民の生き残りではあるらしい。何らかの事情、例えば致命的なテロ行為や、他国家からの攻撃によって合衆国は未曾有の混乱状態に陥ったらしい。

当時既に統治の何割かを機械に任せていた合衆国は、その混乱の最

中で機械を統治する手段を喪失した。

高度な軍事兵器や、ナノレベルでの加工を要するような機械製品は勿論のこと、そうでない消費財もまた機械たちの管理下にあり、それらは原料の調達、加工から最終消費者への流通に至るまでが自動化されており殆どの人間は労働の必要さえ無い世界であつたがそれが災いしたらしい。

その混乱から後、新しく生まれた合衆国国民は機械にそれを認識してもらえなかつた。

たつたそれだけのことが、あまりにも致命的に国家の崩壊を招いた。

何しろ技術と物資の殆どが合法的に提供されなく成るのだ。

その結果が今彼らの持つている粗末な武器に帰結する。人間が、人間の手によつて制作できる最も高い技術レベルを持った製品たち。

勿論電子的な制御を行うために必須と成るICチップ等は厳密に言うると人間の手では生み出せないが、アレらは規格さえ踏襲しておけばかなりの汎用性を持つ。流通などを行つているドローンを撃墜したもものから鹵獲して必要数を補つていゝらしい。

そういった鹵獲を生業にするクロウラーと呼ばれる職業の者にとつてこの場所のような半壊した軍事施設というのは宝の山に等しい。

数十年の時間をかけて、生き残つた人類は繰り返し攻勢をかけたさうだ。

私のような軍籍を持った兵器というのが暴動の鎮圧に駆り出されることは軍規上ありえない。それが5世紀にも渡つて、国家が滅亡していくその時を寝過ごす私という神を締め上げたくなるような珍事を生んだわけだがそれはともかく。

漸く陥落したこの施設から物資をまきあげる中で発見された私の処理を任されたのが彼らだつたというわけだ。

もしこの話が本当だとしたら、私はこの世界においておそらくほぼ唯一の機械達から認識されるIDを持った法律上の人間ということになる。

最も高々一兵卒のセキュリティイクリアランスで出来ることなどが知れているし、それによつて今この国家が陥っている状況を打破できると思うのは樂觀に過ぎる。

むしろ彼らから見れば私は、自分たちを正当な人間として認識してくれる唯一の機械ということに成るだろう。

この国で最後に残った軍人として判断を下すなら、私が取るべき行動は一つしか無い。

「当機は…貴様らに協力を申し出る。軍人として、国民の身命を守るのは義務だ。」

青年の話を聞いて、判断の時間を乞うてからそれなりの時間が経過していた。

流石にその間ずっと手を頭の後ろで組んだまま棒立ちしているわけにも行かなかったのだろう。逃げる勇氣は無いものものそれなりにだらけていた彼らはその発言に少しの間呆けた後歓声を挙げた。

どういふ筋書きで上司に報告するかは知らないが、手柄であることは間違いあるまい。

最初の『協力』として、破壊してしまった彼らの足代わりをすることに承諾させつつ、私に対して代表の青年は口裏合わせのための打ち合わせを要求する。

それを了承し、青年と話をしながら自身へとAPCを括り付けるべく奮闘する少年少女たちの世話を焼きつつ私はふと気づいた。

私は恐らく、死ねない。